

須賀学園生徒会

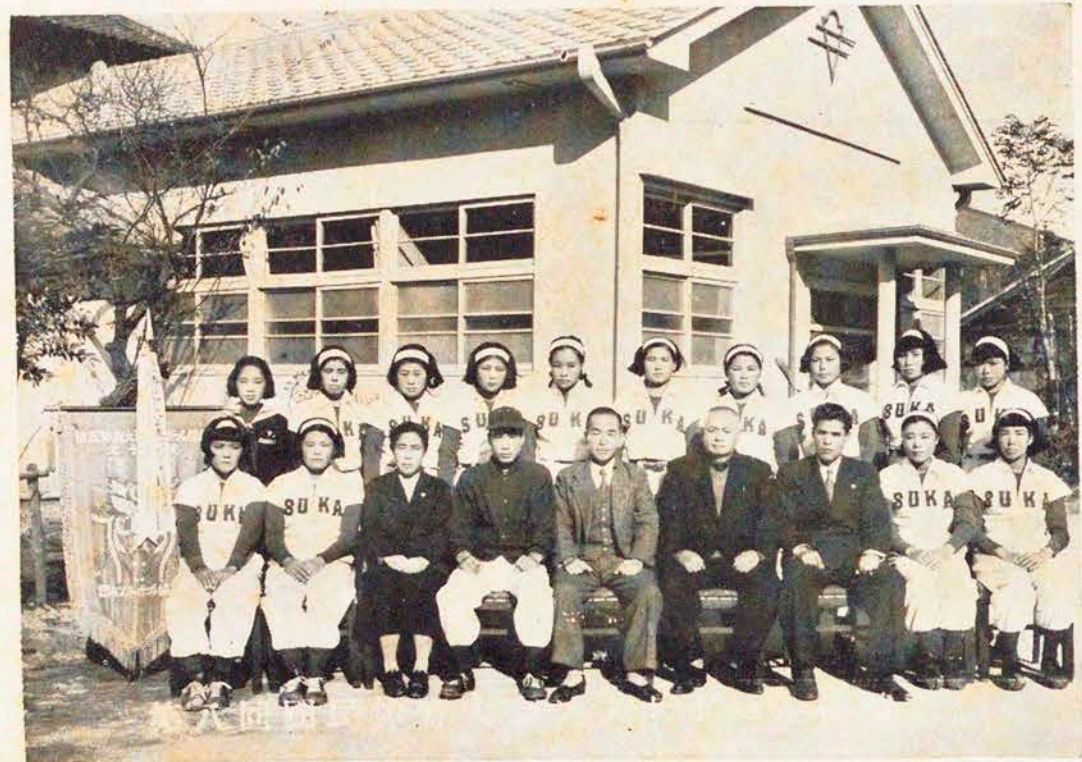
# ひめまつ

昭和  
29年  
3月  
5日  
印刷  
發行

ソフトボール優勝記念号







第八回国体ソフトボール優勝当時のメンバー



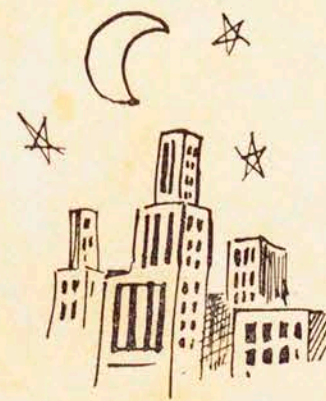
優勝旗を先頭に賞状は校長先生が

ひ め ま つ

第 8 号

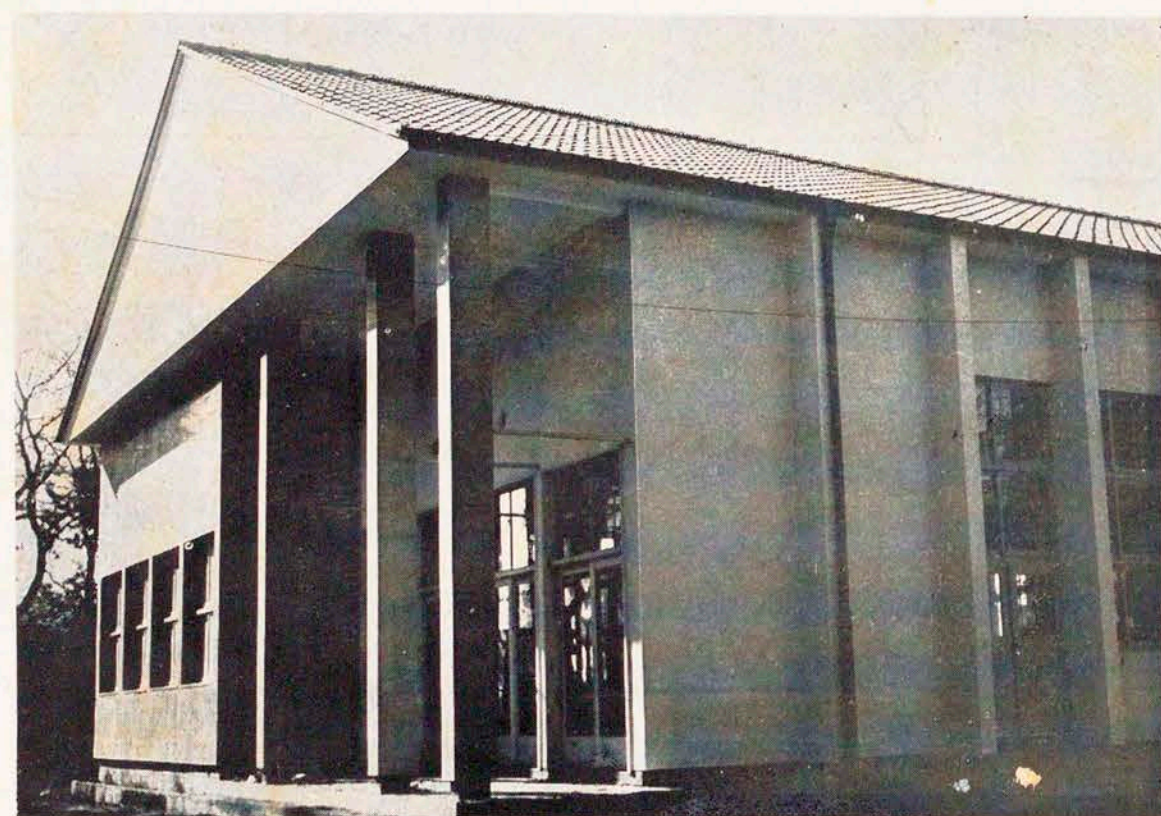
＝目 次＝

巻 頭 言	学校長 須賀友正
優勝旗に涙あり	土 岐 栄
感 激 の 日	
栄冠常に涙あり	菱 沼 ウ タ
私 達 の 講 堂	秋 沢 テ ッ
須賀栄子先生の二 十年祭に当りて	池 田 範 子
私 達 の 詩 集	
私 達 の 作 文 集	
私 達 の 句 集	
私 達 の 歌 集	
ク ラ ブ 活 動	
昭和二十八年度学校行事要覧	
職 員 住 所 録	
編 集 後 記	
表 紙	島田 訥 郎
グラビヤ	……第八回国体ポートレート





創立者 須賀榮子先生



新装成れる須賀講堂



現校長 須賀友正先生



閉会式場



優勝旗授与(菱沼主将)



優勝の喜びを満面に本校チーム



# 巻 頭 言

学 校 長  
須 賀 友 正



今年の正月は例年になく温かかった。松の内の明るい日射しの中にも、農作物のことが気にかかった。妻が伸び過ぎはせぬか。害虫が多くなりはせぬか。凶作の次年度なので、殊に気にかかつてならないのである。

大地に思いを寄せながら、明るい庭に眼をやつてみると、私の脳裡には、あの四国の国体におけるソフトボール優勝の情景がまざまざと浮き彫りされて来る。苦節三年、今年こそはとひそかに期するところはあつたが、全国の強豪が覇権をかけた一戦である。そう易々と勝てるものではない！ ほんとうによくやつてくれた。全校一丸となつての努力と精進の賜物と、今思い出しても眼頭が熱くなる思ひかする。

その喜びに引きつづいて、多年の懸案であつた講堂が素晴らしい出来ばえで竣工した。これからは安心していろいろの催しもできる。本校の文化活動もこの立派な講堂の落成によつて、一段と活潑化することであろう。PTAの皆さん方と共に心からの喜びを頂きたい。

その他大局的見地からは、私学三法の制定で、私学が公立並となり、その地位が著しく堅実化したことである。すなわち私立学校法で私学の公共性が強調され、私学振興法で財政的の国家援助があり、共済組合法で教職員の身分が保障されたことなどである。これからは私学三法の運営が私学の責任である。不肖に鞭うって私学振興のため一念を凝らして行きたいと念願している。

恒例により、卒業する皆さん方には、今年はトルストイの次の言葉をばなむけたい。

「美は微笑のうちにある。笑つた顔に愛嬌がかんたら、世の中にこんな美しいものはあるまい。微笑は人の心の精粹であり、最も高い美しさだ」 (昭二九・一・二三)



会場入口(国体)



集い



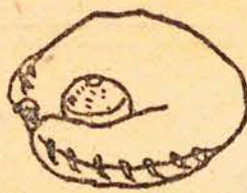
船上にて(国体・高松港)



# 優勝旗に涙あり

ソフトボール監督

土岐 榮 記



第八回国民体育大会女子高校ソフトボール競技の最終日、昭和二十八年十月二十六日の午後十二時五分、宿願の全国制覇が成されたその時である。四国は坂出市営球場において決勝の白熱戦が終り、万雷の拍手や歓呼、そして熱し切つた興奮の中で、嬉し涙で雀躍りする選手を前に、私達の名校長須賀友正先生が感涙にむせびながら優勝の電文を書いたのである。「ユウシヨオキニナミダアリ、ヤスダヲ一タイ〇ニテヤブル……スカ」と。正にこの歴史的な電文は本校ソフトボール部の全国優勝を如実に物語るに適切であり、又この言葉を思い出すと、私達が一生忘れ得ない深い感銘や、努力の結晶が満たされて居ります。その日は丁度国体日中で、紺碧の空に緑の海、延々と並ぶ塩田、左の方には讃岐富士さえ悠然と見えて、待望の決勝戦は広島県代表（昨年度優勝）安田学園高校と火ばなを散らして闘つたのである。それは宿敵同志の対戦であり、観衆は完全に二組に分れ、スカイツと声の限りに怒鳴れば、ヤスダと叫んだ東西対抗の一戦でした。白いユニホームも汗にまみれて汚れ、脂汗を額に滲ませて無我夢中で闘い抜いた決勝戦、正に両校とも伝統に恥しくない戦い振りであった。

「優勝旗に涙あり……」今この優勝旗は全校生徒千四百有余名の学び舎、私達の須賀学園校長室にその榮冠の苦しさも語らないで、他の優勝旗や応援旗、そして多くの戦績をシンボルする賞状と共に燦然と輝き、静かに收つて居ります。

この優勝旗こそ私達のすべてであり、今年も又例年の如くこうして団体の記を書くに当り、須賀校長先生の言葉を拜借いたしました。この一文を書くことはこの上もない喜びを感じて居ります。

## その一 縣下豫選に優勝

毎年初夏の頃行われている全日本選手権大会の予選に矢板高に決勝戦で負けてからは（第二次予選も茨城県代表二チーム、栃木県代表二チームが水戸海城グラウンドに集まり戦つたが、結局本県代表同志の決勝となりこれ又矢板高に3A-2で惜敗無念の涙をのんだ、儂なきは人の世の運命）ソフトボール部全員四国の国民体育大会に出場することを目標にして練習を開始した。もうすっかり初夏も過ぎ一日暑さを増す許りで、練習中は相当の発汗を催して身体がクタクタになった。生徒が少しでも緩むとすかさず私は一弾を放つた。「お前達はあの惜敗を忘れたのか。矢板高に負けて先輩の築いた伝統を辱めて何んとも思わないのか。あの寒い冬、男体風に吹きつけられながらトレーニングした苦しさは忘れぬのか。ドロドロのグラウンドで苦しさで寒さで悲しくなつて泣いたあの涙は何処へやつたのだ。一球

落すライオン主義一点張りだ。

☆やがて腹案のボヂションは、助監督の須賀安先生、横山先生と打合せて確固と決定した。投手藤沼、リリーフ大島（良）、金田、捕手福田、栃木、一壘大島（万）、二壘黒崎、三壘阿部、遊撃代田（二）、三遊は年から年中チエヂしたが……左翼齋藤、中堅直井、右翼増川と鉄補の布陣を。

監督としてボヂションとバッティングオーダーを発表すれば後はそのまゝ陣容を強化するだけである。尙も練習は無茶苦茶に続行した。雨が降れば降つたでそのまゝすぶぬれになつて。暑ければ暑いで一層馬力をかけて選手に水も飲ませずに。（練習中はどんな真夏で暑くても水は飲むことを禁じている。身体のコンドイション調整と意志訓練の目的で。選手はこのため気が狂うのではないかと思ふ程我慢をする。私も勿論同じ条件だが平氣の平左だ。時々生徒は水を飲めないなら死んだ方がましだなど云うが……休憩になつて飲みはじめるとそれはそれは一升入ヤカンに五、六杯のおかわりにビツクリ仰天）練習強化の合宿も春の真中に行つた。楽しそりに見えるあの合宿生活もまた目標に向つて連日連夜の猛練習以外何もなかつた。一通りの練習も終えて夕食後、藤棚（学校支関前）の下などで語り歌を唄つている内に郷愁を感じ、毎日の疲労の痛さと暑さで月の照る夜など私には内証でシクシクメツメツ、適当にやる者も中には居るらしかつた。女子高校生のセンチなれば仕方あるまいが……然し私はこのような者には厳然として云い放つた。「なあんだ泣虫！荷物をた〜んで家へ帰れ、荷札をつけてやるから」と。高校スポーツ界において如何なる場合も斗志こそ勝負を大きく支配する要素なれば選手

々々がチームの勝敗を左右し、学校の名誉も県代表としての責任もある筈なのだ。今こんな気持ちで練習していたのではもう諦めるより仕方がないだろう。もうお前達は今までの苦しさを忘れて諦めていいのか。先づ矢板高を取るんだ、どうしても矢板高を取つて国体予選に優勝するんだ……と。

思い返しては又夢中になつて頑張る純真さが横溢するソフトボール部員であった。

ゆくぞおーッ、ボカーン、ボカーンとノックのボールは雨戦と乱れ飛ぶ。選手は中腰のままボールを打ちまくる私を睨めたまゝ、ボールが自分のゾーンにいけばボールにとび付くだけであつた。稀には本能的といおうかエレギラバンドがとどろき顔をそむける。「なあーんだ、そんなボールに逃げる者があるかーッ、ボールに自爆しろ、痛くていゝ氣持だーッ」何んと云われてもハイハイとひたすらに技とそれ以上に心を練るソフトボール部の生徒の姿。

練習は常に涙があるのである。夢見ずやあの四国路、苦しくとも暗れの出場はどうしてもあきらめられなかつた。それから私は去年のメンバーより投手斎藤光平、一壘齋藤佳子、二壘飯田房枝（技術的にも精神的にもチームの支柱であつたが……）の三名が卒業しただけで、後は全部残りベテラン揃いであるから技術は心配どころか守備、バッティングはより以上強力になり、唯一つ問題はチームワークだけであつた。高三生八名の選手、誠以て群雄割拠の状態では常にチームワークをがっちりだけ考へて練習場に臨んだのである。チームワークは猛練習を徹底的に実施すればする程完全、やつてやつてやりまくればガッチリとの信念は強く、練習はその精神にみちみちて終始した。知る者は知るその氣持、子を千仞の谷に突



の地声もやつぱりねえである。学生時代最高の思い出となるべき  
関西修学旅行にも進んで参加しなかつた高三生部員全員など献身的  
な精進を考へる時、又私は口程でない可愛さが胸一杯になる。

どんなことをしても四国に行かせたい。  
長くは六年間、短い者でも三年間は私とやつたこの生徒達に、晴  
れの優勝の感激を味わせねば可哀想な気がする。そうだ今はいくら  
苦しめても国体での喜びを待とう。

ホーラ毎日ピースをゆらくとふかして、ニコニコグラウンドに  
見える須賀校長先生は今日も又姿を現して熱心な練習見学、(その間  
にピース一箱分位は吸う習慣、ソフトとタバコと……がお好きらし  
い時々ナイスナイスと彈丸ライナーを賞め、苦しさを慰め力づけて  
下さる。)ソフトを一日だつて忘れぬこの校長先生にしてこのソフ  
トチームありだ。団結の中心、頑張りの中の校長先生。ベンチに  
見て居られればさあ今日も元気で頑張りましょうや。艱難汝を玉に  
するとか……。

☆ストロースタジアムに三壘側は須賀高応援団。同じく一壘側は  
これ又宇女高応援団。決勝戦らしくギッシリと応援はめ寄り試合  
開始を待っている。ワアッと三壘側が呼ばばウウツツと一壘側は答  
える。時間は刻一刻と勝負を決定づけるかのように迫ってくる。

よおーし今日の宇女高も又春の準決勝の時と同じく本校独特のス  
アストブレイクで一気に粉砕してやらん哉の意気に燃えている。私  
も確固とした策戦は一週間前に決つていた。宇女高と言えども飛ん  
で火に入る夏の虫である。(宇女高は今年こそ国体へと勝負い込んで  
いるように殺氣立っている。)先攻は須賀、いよいよ試合は始まる、  
対等にて優勝旗を握る。  
優勝の瞬間。離れし目撃する感激のシーンであろうが敵も味方  
も総立ちで感激の叫びと万雷の拍手の交錯である。すぐスタンドを  
見た、校長先生が両手を高く挙げて一段高くバンザイ。バックネット  
トの裏の人も私を見てニコニコ顔、嬉しい、唯嬉しい野望の実現。  
選手は手に手を取り、過ぎし日の苦勞も忘れたかのように四国国  
体参加の夢実現と。皆様の期待に応えた喜びでんやわんやの大騒  
ぎである。この姿を宇女高ベンチは涙のあとも痛々しくジロリジロ  
リと横目を投げる。

あゝ痛快なるかな、我が校ナインに繰る優勝旗。  
去年のリボンに加えて真新しい優勝、昭和二十八年宇都宮須賀  
高等学校と記したリボン。

遂に宿願叶い三年連続優勝成る。  
目指すは第八回国体である。

青い空も茜色に染つてくる。バンザイだけが何時までも何時  
までも心の中にひびき渡つて……。

その二 待望の四国へ

☆社行金は十月十六日の午後一時。全学生の盛んな声援を受けて  
挙行され、十八日午後四時職員、父兄、全校生などに見送られて校長  
先生始めPTA会長大塚氏、横山、荒井先生、選手一同は元氣よく  
宇都宮駅を出発した。東京駅発は九時丁度、急行列車広島行安芸号  
で一路憧れの四国路に向つた。(車中略)

岡山に着き、乗換えれば三時間位で宇野の港。途中は全員居眠り  
専門。……やがて汽車は宇野の港につけば眼は見事にまん丸キョロ  
キョロ。白、赤のバンキに塗りつぶされた棧橋ホームを渡れば一望

右バッターボックスに一番打者の黒崎悠然と入る、相手は増淵、高  
村の陽北中時代よりの名バッテリが猛烈にやつているウオーミン  
グアップ。

審判の手がサアツと挙げればプレイボールにワアツと歓呼が答え、  
第一球は生意気にもストライク、第二、三、四球とボールの後、黒崎  
一ストライク三ボールである。ベンチの方をチラツと見た(選ぶか  
打つかとぎいてるかのよう)に、すかさず思い切り打てのサインが  
飛ぶ。黒崎ニコニコ笑つて第五球目待ち、運命を決めた第五球、黒崎  
は動中静ありて確固として打つた。コッソソ。青い空に弧を画いて  
白い球は右中間に飛ぶ、思わすの拍手、思わすの応援生徒の歓声の  
嵐。黒崎は二壘態々セーフの堂々たる二壘打。試合はこんな時に相  
手のピースを乱すのである。その仕込みも行届いてバッテリがこ  
ちらのベンチの喜びを見ると、わざ／＼「ナイスピッチャーもう一  
本頼むよおーツ」となる。増淵投手口惜しくてフリフリ顔、少々  
例のヤケ気味に染めはじめ。(すぐヤケルのがこの投手の欠点であ  
る事全部承知)やけくそにピュンピュンと夢中になつて投げるとこ  
ろ二番の代田にセーフタイムアウトをコッソソとやれば、球を拾つたのは  
よいが慌て、何処へ投げてよいか地べたに向つて叩きつけた。策戦  
見事に成功しつゝあり。黒崎は三壘へ代田は一壘へセーフ、ついで  
てバンドと見せては打ち、打つと見せてはバンドをやり、アツと云  
つてる際にボンボンと二点を先取して満塁、さしもの宇女高も既に  
国体の夢は覚まされてしまつたらしい。宇女高監督の青木先生も私  
と視線が合うとニヤニヤ照れ隠しの体である。この日菱沼の好投、  
斎藤順の逆シングル転倒好捕球のフライングプレー、黒崎、代田の強  
打、阿部の好守など文字通り発揮して四回に更に一点を追加して三

千里の彼方に眺められる瀬戸内海の絶景。  
五千トン級の白く黄色い紫雲丸の巨体、出発をすくにして黒い煙  
を延々と。

晴れて青くキラキラ光るさざ波の海。  
島かと思えば岬であり、岬かと思えば点々と連なるみどり滴  
る松の島影。

その島と島との間を飛ぶ純白のカモメ。  
地平線のかすむ彼方に四国の山々が。  
遠くの方で港の音、クレインがクワクワと長閑な出船を見送  
つて広い海に消えてゆく。

山国育ちの私達ほどこれも海の風景に魅せられ何んにも云え  
ず甲板の手すりにかじりついたきり。間もなく棧橋がベルと共に揚  
る。シンバルがガラガラガランシンシンとひびく。五色のテープ  
を振りかざしているのは見送る人達と最後のテープの握手だろう。  
ホ、ー、ホ、ー、ホ、ーと別れのドラの音が波紋のようにひろが  
れば、巨体はゆるく静かに船尾を洋上にくつきりと残して高松の港  
旅出す。

小豆諸島、嘶に有名な鬼ヶ島、そして右に尾道、松山航路、大き  
な船がドラを合図にすり違い、手を振る船上の人。その昔源平の戦  
に那須与一の扇の的で有名な屋島、その下の壇ノ浦も見える。たつ  
た一度でいゝから故郷で優勝の吉報を待ちわびる人達に乗せてあげ  
たいこの連絡船。大きな波のその上に、更にまたさざ波がゆれて太  
陽に輝き、舷より散るしぶきは見る眼も吸い込まれるような虹の弧  
となつて散る。  
独り知る優勝チームの幸福感。



☆青い海の色に白い巨体を映して紫雲丸は無事高松港埠頭に錨を下した。先づ選手一同の第一声は口を揃えて「四国島つて大きいねー」ついで「しかし綺麗だねー」たしかにその通りである。

明日天皇、皇后両陛下をお迎えして帰りの順路になつてくる。高松港はベンキを塗り替へられて、色電球とモールのアーチ等にマツチして眼も覚めんばかりの団体選手歓迎色に誘ひ込む。駅前にあつたアーチなどは形容のできない程立派で近代センスが盛られ規模が大きかつた。慈々四国に着いてこゝより予讀本線に乘車することになつてゐる。

あこがれの四国、そして美しい田園。  
立並ぶ松の濃緑の姿。栃木では見られぬ塩田。そして山と海の調和。云うならば気候はよく山の幸あり海の幸ある四国は正に天国である。高松より六つ目が坂出であるが生徒は駅を一つ一つ数えてゐる。東無厭なんてへんでこりんな駅名もついで出す。山を過ぎれば海。海を後にすれば黄金色の田園と茶褐色の塩田。

「坂出サカイデー。」ついにきた坂出、毎日々々指折り教えていた坂出。我が校の意気と胸を示す坂出。ついにきたのである。私は真先に後につぎと伝達してホームに降る。やあいた〜出迎へての人がやつさもつさする程大勢いた。

先づ婦人会長、ついで坂出高校長。大きな旗を振つて迎へてきたのは事務局員五十万名。女子高校生は二列に入垣を作つて私が先頭ついで一同が拍手を浴び「苦勞様」の声に迎へられてぞくぞく外へ。ほんとにこの時の気持は今尚忘れられない第一印象だつた。大通りらしい雑沓する通りを曲り抜けて第一百貨店より目指す金太樓へ。この時旅館より迎へてきた小父さんがあんなにも献身的な親を癒くの感。

歴史はこゝに五十年、すみれの花の集まきて、今彌祭の學び舎に清心に咲かん時なりき、須賀、須賀、須賀アア、これぞ吾等が須賀学園タラ、々、皆ニコニコ、斗志のチーム貴録十分。

右は瀬戸内海で、左に讃岐富士の麗姿、西は常緑山公園で、東は坂出工業高校。その間に四面のダイヤモンドは瓦礫の小粒も平らに待つていた。Aコートは地元坂出高校選手の練習、Dコートは本校。今朝の新聞にも大々的に列ねた各校の到着便りは相当来坂した旨。必ず後続来ると思ひしに案の定、本校について見学旁々練習にきたチーム。本校と坂出高校とに恐る。ソワソワシロシロ。

一番打者は例により黒崎二、三本景気よく中前、二壘後にライナーで飛ばせば、二番の代田巧妙なセフティバントを首を曲げつゝ当てて。三番大島方敏感なスイングは左翼、三壘方面と。三壘の阿部も軽いゴロさばきは一壘へ鉄砲玉の投球。四番は一番スタンスの大きい福田、外角は見事に右翼へ、右翼増川は普段出ないような大声でオーライオーライ、ボツンとグロップの中へ。ついで投手の翼沼シャープな当りは遊撃、左翼方面へキーンと持つて行つてはニコリとこちらを向く。捕手を務める栃木の黄色い声もポリュームに満ちて投手塩山を力づける。外野の齋藤、直井、増川も勝敗の鍵を握つてゐるのかのように思ふ存分打ちまくりボタリボタリとラッキョーの

切さで戻してくれ、又スポーツには友人張りの予想などもして仲々の社交家であつた)一体に四国人は社会体育オール五が多く(泥棒がないと断言できる四国人の誇りを持つてすれば見当はつくでしょう)百聞は一見に如かずです。金と暇がありませう方はどぞ。

☆全員広間に集合。八時丁度、キャプテンより報告あり。用意も万端OK。一同を前にして念の爲の注意「今から言うことは学校で詳しく説明した筈、簡単に伝えておく。その一、どんなことがあつてもメソメソしたら承知しない。これはどんなことであつても意味は広いから注意を要す。その二、いつでも考へて注意力を最高度に働かせよ、若し一寸でも油断するとボールが跳び、必ず命中するからその心算で。その三、練習方法は学校の通り、しかし球場が違ふが、その球場の所感、夜きくから意識して練習して行くこと。こゝに来たことはなんだ、ハイ「要するに試合に来たのです」よろしい、以上のこと守られぬ者は荷札をつけて宇都宮に送り返すから左様心得よ。ハイハイ……」慈々練習への出発。案内者はイボ金代理と実修高の前川静枝嬢。(本校チームの世話係濃厚、優雅、熱心な生徒)それから集合は一刻でも早く遅れるな、監督が恐ろしいぞお！

栃木県代表、宇都宮須賀高等学校御宿と貼紙してある支関前路地に全員集合、張切つた面ざしもユニホームとよくマツチして。健康状態全員良しの報告。二列横隊背の順。ザツザツスパイクの音も力強く歩き出した港町商店街通り。軒並に顔を出すはみな珍らしそんな私達に視線を二齊放射。昨年山形の団体は第三回戦香川県代表明善高校を延長戦と日没再試合の引分を演じた熱戦の上遂に二対零にて堂々勝利を収めたそのブライドが胸を張らせた。

よる汗の玉。今日も又暑過ぎる程暖かい初秋の日和である。坂出高校よりも大黒氏(香川ソフト協会所属の若手投手、日体大生、バザーにも来る)が見えてよう打ちよるわいと賞讃。それからシートノック、バント練習、ランニングと矢張り早に終つてはつと一ふく。生徒は牛乳をコップでゴクゴク。

ついで次の日も九時より一時まで猛練習、校長先生も細い神経を削つて下さりあれこれの指図。何処に行つたつてこんな熱の入つてゐる親切な信頼の出来る校長先生は居ないでしよう。学校許りでなく団体的存在であると断言できる。この校長ありてこのPTA会長ありて大塚氏の世話振りを親身であつて至れり尽せり、故にこの方達のミックスとしてこのチームありたろう。

今日も暮れたかよ、四国の球場でよ。然し二日は中央小学校の庭を借りてやつたのでそれは張切られなかつたが、然し練習見学のオッサン連中は凄く批判に夢中の様子。後で分つたのだがハンチングを冠つたオッサンこと森雅夫氏(ソフプロ野球旧全大連監督)曰く「第一回戦の大阪、お宅ならやれるジャケニー。大阪は巧いけど強くない、元気がなくチームワークがない。その点お宅なら十分、巧いけばワールドゲーム。監督さんよお仕込みようなさつたニッパなア〜牛乳途端にうまくなりお替りもう一杯。新井先生ワフ、々、だけど本気に出来ない試合前の胸の中、あゝ紅の血は燃ゆる。

その三 晴れの入場式！  
☆遂に来た。入場式の華麗さと、満場感激にわく試合のその日は。十月二十二日は遂にきたのである。相も変らず本校は午前中練習。午後二時丁度開かれる開会式に臨む予定。落着いて中食。集合は正十二時。支関前で用具の必要なし。みな晴れ着を飾つてバスの中も



静かに球場に向つて眼をすえたまし。

ドドドド、パン、パン、パン、パン、パン。と尺玉の仕掛花火は青い空にバラシユートを残して散る。幾千幾方を数える大観衆は天を向いてワァーワァーと一大音声にかためて轟かす。バラシユートとバラシユートのワワと飛び交う紺碧の秋空に、更に又幾百の風船の玉の色も鮮やかに空を埋める。ワァーワァー。ドドドド、パン、パン、パン、パン、パン。手に音律となつてひびく入場式の行進曲。ゆるく強くしかも美しく。若い力と感激に、燃えよ若人胸を張れ、

歡喜あふれるユニホーム

肩に一ひら花が散る、花も輝け希望にみちて

競え青春強き者!

アナウンサーは「あくまで澄み切つた秋空の下、瀬戸内海の島々をながめながら、そして左の方に聳える讃岐富士を背にして、今こそ坂出市営グラウンドにおきましては第八回国民体育大会女子高校ソフトボール競技の開会式を始めようとして居ります。

十月二十二日のこの日恐れ多くも天皇、皇后両陛下の御台臨を仰ぎ今一齊に入場式をはじめるところでございますが、この地に集れる乙女等は全国女子高校の精鋭四十三チーム、はねおどる鮎の如、若き五体に希望をみちたぎらせ、その足音も力強く西入口より堂々の入場がはじまりました。奏でる行進曲若い力に歩調も正しく、若き血は燃えて生命の華が刻一刻とひらいていきます。先づ先頭に大会役員八十余名が二列縦隊、つきましては本大会の大会旗、更にまた昨年度優勝校は広島県代表安田学園高等学校主将山田巴子選手の手を輝く優勝旗であります。満場の皆様、今皆様の前はAコートホームキヤンパス上に進みましたが、遠く北海道より参りました

れての放送、花火は青い空に。祝福するヘリコプターの花東落下。満場は興奮のルツボ。四十三チームの整列と応援旗、プラスチックのメロデー等正に団体ならではの多彩さ。団体や、よくぞ監督に、生れたりである。空は一層の青さを増して……。

☆四十三チーム応援旗の各種各様なもの先頭に整列。その間に日の丸も揚つた。君ヶ代が終れば静けさの内にも喜びと緊張とを秘めて優勝旗返還は広島代表安田学園山田主将。ついでに本大会々長四角誠一氏の開会についての激励の辞、坂出市長の祝辞などを終えて。美しの山河なり、若き光呼ぶ四国の地よ、

真澄める空に紅見ずや

あゝ聖炎の耀よう死に晴れの団体

いざ讃え生命の花のひらけるを……。

の団体讃歌のコーラスをきく感激さ。

間もなく……一列縦隊に並んでいた見事な団体美も解かれて軽いリズムに合せて四つの出口より姿を消していく四十三チーム。本校もプラカードを持つ実修高校世話係の前川静枝さんについたままAコート出口へとつづく。この間実に三十分。

グラウンドは又旧の騒然さに返り、Aコートがワァーッと呼ばばCコートで亦ワァーワァーッと応えて、団体雰囲気は盛り上る。観衆の勇姿に刺激され、今団体の花は真澄の空の下で開かんとしている。人間がスタンドにウヨウヨする姿はあつて、誰れも今は居ない球場に白線は見事に引かれ、人の波とはつきり翻しているAコート、第一試合は遠く九州の一角よりの鹿児島商業高校対福岡女子高校の試合。いよゝこの日を待つて鍛えられた本校チームも明日の第五試合

た北海道代表道愛女子高等学校チームであります。どうぞ拍手をもちつてお迎え下さいませ。つきましては青森県代表は中央高等学校チーム。野を越え山越え海越えて、晴れの栄冠を競う全国の代表、元氣も溢れる許りにぞくぞくと續いて参ります。東北代表につきましては北関東代表の三チームであります。七番、七番は茨城県代表は太田第二高等学校チーム。つきましては八番、八番は皆橋御存知の栃木県代表は宇都宮須賀高等学校チームであります。宇都宮須賀高等学校チームは(こゝには校長先生正面の役員のズラリと並ぶを尻目に、愛用のカメラを抱いて立つたり座つたり、右へ左への懸命の撮影、私はチラッとその姿を横目で見ました。真剣そのもの夢中の様子。心の中でその真心に嬉しかつたものこの瞬間)一昨年第六回広島大会におきましては全国準優勝、又昨年の第七回山形大会におきましては力戦奮斗本県代表(香川)は二年連続優勝の明善高等学校を第三回戦にて日没引分再試合、延長合計二十三回戦の末堂々一対零にて取り、全国第三位の栄えある伝統に輝いているチームであります(勿論満場一人残らず立上つては万雷の拍手)今先頭にユニホーム姿は監督は土岐(一張羅の顔)ついでに黄色の応援旗は眼も鮮かにチームワークをシンボルとして手に持つのは主将は投手菱沼選手。ついでに捕手福田、右翼増川、二塁黒崎、三塁阿部、遊撃代田、左翼齋藤中堅直井、一塁大島万、栃木、大島良、金田と白のユニホームはエンズのSUKAのマークも美しくブルーのアンダーシャツにブルーのストッキング。優勝候補は東日本の雄須賀高我チーム、更に又(数方の群衆拍手、又拍手に湧く)胸を張つては正々堂々の入場であります。(行進は一番うまかつた)……ベラベラベラつく……最後は香川県代表は坂出高等学校チームでございます。」とアナ君は呼吸も忘

は対大阪阿倍野高校とと挑戦の予定。そう思えば他校の試合にも力が入り、独りでに胸の鼓動の激しくなるのをどうすることもできない。休養、休養こそ試合に反映するので、再びバスにつけて華かな球場を後にする。

校長先生が一通つづつ激励電報を讀み上げては横山先生が普通文に書き加える。

「アスノガ ンバ リヲキタイス アベノナニモノゾ スカココロ」  
「ダ ンキデ ユウショウライノル ミチコロ」(ミチコちゃんとは校長先生の愛孫で本年二才のお嬢さん)大塚PTA会長はウフ、とと驚いた顔を浮かべ、勿論校長先生もニコニコ恵比寿顔。「オ、サカアベ、ノニカウツキタイス?」と明日の本校が第一回戦で敗退するか野望を実現できるかの関ヶ原合戦、大阪阿倍野高校との試合ばかり。(尤も本校強しと云えども春のオールジャパン大会には本校と県下予選で決勝を行い勝つた矢板高が第一回戦に組合せ九A対零にて負けている許るか阿倍野高校は余勢をかつて安田学園と決勝戦を挑んだチームである)然し今ここに座り居る五人、校長先生、大塚氏中村氏、横山先生に小生は負け惜しみでなく異口同音に。

ナニ阿倍野でもどこでもつてこい、片々端から叩き潰してやるから……と壘を蹴る。選手も撃破の意気に燃えてるので私も自信が満々、作戦は慎重に進める考えであつた。

校長先生にも明日の策戦の大意を説明して了解済、後は実戦をまつのみとなつた。程なく宮嶋氏(市会議員、庭球一般監督)が陣中見舞にお出になつた。(以来宮嶋氏は本校チームがすっかりお気に召したらしく、始から終りまで本校すめとなり庭球一般監督はそつちのけの形であつた……)



選手もすっかり馴付いて「宮嶋先生 歯医者なのにとどうして前歯が歯ツカケなのと、……これにはさすがの宮嶋氏もない前歯を開いてダアツ。純真無垢な選手は明日の準備を終り、電報の激励を聞いて元氣よく床の中に潜つた。丁度午後八時。電灯はバアツと消されたが、試合を明日にして寝る今夜、お互に見る夢は勝利の夢か。唯我が愛し子の選手達よ明日は悔ない迄に頑張つてくれと心の中で願うだけ。夜は静かに更けて月が洗々と光り何時しか眠りは深まつていく。

その四 再び日夜引分の熱戦

☆試合、試合。大阪代表阿倍野高校との対戦、クソツツ負けるのか。どううしてみずく阿倍野高校の軍門などに下るものか。そんな須賀高と須賀高が違ひ、よおしやるぞ、力のある限り、この五体に意識のある限り。郷土の人達は皆んな勝利の電報を鶴首して期待している。さあ早く早く起きろ。(私は寢床に入っている内から阿倍野高校選手と監督安永美雪子氏を眺めていた。)午前中簡単にトレーニング。午飯は十一時三十分集合。二時三十分開演、注意の後一時三十分出発……。時間は過ぎて……。校長先生静かに「落着いて常日頃磨いた腕を完全に発揮して、代表の責任を果たすことを願う」と一語々々はつきりと伝える。PTA会長は更に「何も云うことはないが勝負というものはその日の運不運によつて決るものだが斗志さえあれば必ず相手を倒せる運が向く」と力を籠めて励ます。ついで私も(この日のために毎日職員室の隣席の鈴木先生より夢中になつて生返事許りだと冷かされたながら用意したチーム全体と又個人別)注意事項を付け加えた「一々注意すれば二、三時間位かゝるから簡単に要点だけを伝えておく(勿論校長先生、PTA役員、私の

せたまゝ横付けになつた。いよゝ来たのである。そしていよゝはじまるのである。相手も必死のこの球場で。(全校の生徒よ、先生よ、県民の皆さん、待つていて下さい今日こそ今日こそやりますから、凱歌を凱歌を待つていて下さいと幾回となく心の中で) あゝ我が青春に悔なし!

☆三壘側スタンドより「フレイフレイ須賀高」一壘側スタンドより「頑張れ! 頑張れ! アベノ」の声を響かされて数千の観衆が取囲く熱気を帯びた声はベンチに飛び込んでくる。選手は呼吸は荒く、そして細かい。私も心臓の脈が一つ一つドキンドキんと。

サアツと散つて「行くぞ」の掛け声も勇ましく十二名の代表選手キヤツチボール開始は本校チーム。ベンチの後で応援旗を中心に須賀校長先生、大塚会長、中村委員、横山、新井先生、宮市教育長立入氏、宮市体育協会会長小野氏、県庁役員諸氏、栃木ソフトボール協合理事長小寺三五七先生がじつと見ている。先攻は本校チーム。規定によりヒールディングは大阪が先。「只今Aホームにおきましては本日極尾の試合を飾りますは栃木県代表、団体の雄宇都宮須賀高校チームに対しましては大阪代表試合巧者の阿倍野高校チームであります。只今シートノックを行つて居りますのが阿倍野高校チーム。スターティングメンバーは投手吉岡、捕手は主將の重成。一壘永田二壘西田、三壘古川……云々。つゞきまして先攻の宇都宮須賀高チームは一番二壘の黒崎、二番遊撃の代田(間違つて放送)……云々」こちらは試合巧者の阿倍野どころではない。一か八かの闘いをこれから開始しようとしている矢先で、悠長なアナウンスがウラメシイ。選手はホームに集まつてバアツとボヂション目指してランニン

話の時は選手は全神経を集中して聞く、これだからソフトボール部は一人残らず学業も優等生なのである、成程々々「その一はチームとしてコレコレベラベラ……その二は個人別としてアレコレヤ、ハイハイハイ。然し作戦において最も大切なことはサイン。サインは出す時に限つて勝敗のキーポイントになることは承知の通りで一人がミスすれば云々……」終り。ではすぐ出発。支関に出る。専用バスが待つて居る。さあいくぞ。旅館の全員、又隣近所のファン数十名に囲まれて出発する栃木県代表の宇都宮須賀高等学校チーム。速い日がひとりで浮ぶこの日……一昨年尾道では決勝で惨敗した悲しい経験。昨年は準決勝で不覚の惜敗をしたこれ又悲しい連続の体験。そして来年こそ、今年こそと離れにも云えないで、すべてを犠牲にして頑張つたあの練習。よく怒鳴り散らし、よく打ちまくつたあの練習。暑い汗の滲む日もユニホーム一つで、寒い冬の日も木枯に震えながら……。今こゝにその実が結び、その選手達は一緒に敵陣に迫らんとしているのだ。やる、やる、死んでも負けるものか。須賀高校のあの鍛え方を知らないか。須賀高校のあのファイトを見たことがないのか。選手よ、つゞけ、つゞけ、僕は一番先に突込んで大阪阿倍野高校の度胸を抜いてやるから、お前達も第一がファイト、強く粘り抜くファイトの精神をもつて、技はその時の勝負、相手が打てばこちらも打ち返し、相手がこちらを目標けてスライディングを敢行すれば、こつちはその倍に猛烈にスパイクせよ。僕は負けるのが何よりも嫌だ。負ける位ならスポーツマンならぬ方方がいい。スポーツマンシップに則つて勝つのが最高の理想であり、最高の榮譽なのだ。バスは相も変らずお祭りの盛り場と化したような球場に我々を乗

グ、散開の後、この大会でこの球場での第一球は三壘の阿部がとり、そして第二、第三の球はどん／＼飛ぶ。上出来のフィルディングとは断定できぬが不調と思えぬ今日。(まあほんとうのところ、やゝ日頃の落着きがなかつたのではなからうか)何しろ大観衆が接近して野次るので参つたらしい。しかし試合開始は刻一刻と迫つてくる。ベンチは私を中心に前を覗んだ儘の姿勢。先づ水を飲んだ。ついで皆一杯づつ水を飲んだ。彌次馬も一息で静か。集合ツ、一つサインの復習……。二つ落着けの言葉……。審判が出る。本校がそれつとばかりに駆出す。阿倍野が並ぶ。満場寂として声なく、プレイボール! 途端にワアワアワアワ。正に興奮の坩堝と化した球場。

一番黒崎、右バッターボックスはベンチを見ながら第一球を待つ。第一球ボール、次はストライク、ついでボール、第四球打てのサイン。叩けば三壘手古川。ボールを拾うや疾風の如き黒崎が走り込む一壘へ投球、アウト。ウー無念。阿倍野内野陣にもボールをクルクル廻す。クソツ。二番代田二壘ゴロは一瞬早くセーフ。勿論タイム、タイム。怒鳴る私の方にニコニコ代田が、次打者大島同じくベンチへ。コソコソコソ。やれ／＼須賀高。こゝだぞおツツ。チャンス逃すな。大阪内野前進準備。第二球大島気持よいとこバチンと遊撃強襲ゴロ。驚いた遊撃手後下りながら偶然の捕球はセカンドへ。代田アウトで大島セーフ。然し二死とナリニケリヤ。阿倍野は「ドナイシタラヨカッシャロ」と茶化す。ところが……一壘の大島?にウナツク、投手吉岡ファインプレーに氣をよくして第一球投球すれば、同時に大島一壘より二壘にスチール敢行。見事猛烈なスライディングは



球より三時間位早くセーフ。贈をつぶした捕手オンヤマズ。ドナイソヨウ。二ストライクの後四番福田はシャープに打てのセスターに断然打った。カーン。確かに手応えがあつて中前安打はきれいに悠々一壘へ。勿論二壘の大島敬声と共にホームイン。(貴重な一点)観衆知る者知つて「福田ヤイ、金太郎ヤイヤつたぞおッ。見たか大阪、バス迎えに来たぞおッ」と騒ぐ。一回表二死より一点の先取。(これだからソフトボールはやめられないと云うものウフ、)變つて一回裏は阿倍野高の攻撃。一番遊撃村坂四球。二番右翼田井送りバントは一死で走者二壘。三番捕手キャブテンは重成粘りに粘つて四球と思わせ第六球をボカチン。ボールはボールは見えなかつたが一壘大島がハイジャンプしたのが分つた。ボールはびつたりとミットへ吸付き。その上二壘投球はダブルプレー成る。誠に以てこの日ついていた大島、ラッキーガール。思わず両側のスタンドより湧くわめく拍手、そして又拍手の嵐。(正に入場料六十円の価値は充分)ようやく陽は西山の彼方に没せんとして茜色を内海に映してまばゆい。両軍とも二、三回三者凡退に終り得点なし。本校四回表も遊撃、阿部、直井とこれ又物にならず攻守交代。四回裏は阿倍野高の攻撃。この日快調なピッチングをつけていた遊撃投手のシュートボールにも馴れてきたらしく一番打者村坂二回目の四球。ついで田井四球。三番重成の送りバントは定石の通り。一死走者二、三壘。陽は落ちて夕靄が迫る坂出市営グラウンド。本校絶体的なピッチ。ワンヒット二点をせしめられて本校の野望一回戦で水泡に帰するか。それともピッチを脱して幸運の勝利に浴するか。観衆は固唾をのみ、私達は勇気を振つた。ピッチ後ろでは本校応援団が頭張れ、頭張れしめろと連呼する。

☆私の頭に稲妻がピカッと一線を画いた。よし大丈主だ。去年は無死二、三壘で明善高のピッチを潰したのだ。やれる、やれる。本校には百万人の応援団が居る。ともあれまづ「タイム。タイム」を口にベンチより駆け出して来た私。荒い呼吸をハアハア吐いては選手を投手板の上に集めた。「何んだお前達何を慌て、居るんだ。先づ落着け。あゝそらだお腹空いている人にはチヨコレイト、か水筒詰をやるぞ。誰れか欲しくないか。(緊張に背ざめていたような顔も次第に血色をもどしてきた。内心しめた)……それから今こそ大阪に一点やれ。そして死者数を多く後續を断ち早く攻守交代をした方が賢明。(二点入れられたら一点挽回する覚悟)しかしこの試合は規定によつて五回で終るかも知れない。慌てるな。落着け。考えよ。皆んな待つていろぞ……(選手一同学校のことを思い出して再び勇気を振り出す)あゝとそれから沼(参沼)と福(福田)必ずスタイズをやるから一球毎僕の方のサインを見ること、(ハイ)。オヨン(阿部)シロ(代田)クロ(黒崎)大島分つたな、その時の自分の位置と動き方。(ハイ)外野(齋藤、直井、増川)は絶対に前進準備、終りッ。この間僅かに二分間である。阿倍野高四番打者中堅の齋藤右バッターボックスへ。間もなくプレーボール。参沼こちらをチラッとみて第一球球は外角高目のストライク。ワアッと破天荒の拍手。私は直感的にスタイズのサインを感じた。(二ストライク後はファウルバンドアウトになる、まして失敗すれば走者も殺される、次は必ずやる。)参沼第二球外角高く投球。瞬間打者は跳上るようにしてボールを二壘方面へコッソ。黒崎とつた、バックホーム間に合わず、砂塵を上げて三壘走者ホームイン。二死走者三壘。一壘側スタンド応援旗を振り喜声。眼鏡の女性監督立上つては頭のとつべんからヒステリックな声

をあげて号令叱咤。ニコニコ笑いつゝも心の中で負し魂に鞭打たれる本校ナイン。もうすつかり暮れてしまつて球場以外は静寂そのもの。海には燈台さざめき始めた。五番打者西田。これだけ殺せばもう攻守交代。(神よ、そして紳士の皆様、本校ナインのために幸いを授け給い。何にもかも捨てソフトボールに明け暮れた須賀校ナインの為に鐘を鳴らし給いと。)ベンチ裏の校長先生もや、残念な表情をして選手を力づけて下さる。？みたい、日暮れと共にかせぎ出した阿倍野高はこゝで一気に勝負を決せんと秘術の限りを尽したの攻撃。しかし西田は第一球を三壘ゴロに倒れたのであつた。この時の喜び、この時の嬉しさは他人には分らない程の深刻。快心の笑顔で薄暗さの中よりベンチに還る愛し子達(闇が球場を覆いその上色が黒いので顔が見えずユニホームが走つてくるみたい)ハアハア息を大きくして、ガヤガヤガヤ。五回終了はもう決定的の様子。これ以上の試合続行は不可能。八番齋藤粘つた挙句中堅飛球。ついでラスト増川自由打のサインに頭をベコン、しかし二壘飛球に終る。一番黒崎三回についで安打を当てるかとの淡い希望をかければ遊撃飛球のチェンジ。

もうボールは殆んど見えなくなつた。新しい球とチェンジして真白い球で阿倍野の六番古川を左翼飛球(打たれた瞬間頭から水をかけられたよう。総立ち)にオーライ。次ぎ永田は二球を三遊間抜きの安打。ウーム。ついで小泉投手ゴロは二死走者二壘。ラスト投手吉岡ファル二つの後カーンと中前安打。(アッ)と気が遠くなり、この時の驚いたこと何んの自をつぶつてしまった)それは二壘走者一歩ホームインしたかと。……然し天命は左にあらす三壘ストップ命じた。(大阪にしてもコーチャーの大ミスでこの為後に本校に負ける愛

目に遭つた。こんな時は一か八かが必要でホームに突込むべきだ)ところで一番村坂、参沼と福田のテクニクに引つかり投手飛球に倒れて万事休す。暗闇の中から怒声、喜声の混声野次。闇にひびくは尽きない大喝采。チェンジするや私は「タイム。タイム」。外野を呼んで尋ねるふりをしてすぐ球審のところにとんでいく「ボールが全然見えません」と。群衆はそれとすぐ察知。「再試合、再試合、明日だあッ」「ついでけろーやれ、明日又六拾円取られるんだ」「須賀高監督顔を見せよ、クロイ顔を」校長先生も、小寺先生も勿論試合中止の意向を通呼。この為に秩序ある観戦より混雑と目茶苦茶な姿に變つた球場。そして又向うのコートでも未だ五回まで行かず熱戦又熱戦の連続の模様。球審、阿倍野監督、私、本部長役員諸氏の協議結果は引合試合。明日八時より審判、コート、先攻を同条件のまま、再試合に決定。アナウンスする。群衆は唖つて怒る。文字通りてんやわんやの大騒ぎ。

歴史はこゝに五十年、すみれの花の集い来て、今瀾楽の舉び舎に、清らかに咲かん時なりき、須賀、須賀、須賀、これぞ我等が須賀學園。

真暗になつたグラウンドを後に応援歌も元氣よく金太樓に向つてバスを急がす。明日こそ、明日こそやる、三試合何んのその。残念な内にも希望は明るく決意新たに……。

その五 優勝旗を追つて!

☆宇都宮よりの返電が疲労がグツタリとしている選手達の志気を上らせる金太樓の大広間。保健所より零さん本県那須郡出身の女医はじめ四名の方が健康診断のために来る。



「阿倍野に絶対勝つ注射はありませんか」の選手の声にダジダジ。朝日新聞社団体特派員のT氏、四国新聞社団体報道係のK氏など（到着の夜陣中インタビューにいらして以来、本校チームのファンになり）「名物かまど」などお土産に御出になつてネタを捉え、そしてターバンなど大人らしく巻いている選手を見てユニホーム姿と違いますなあと。こんな時間はほんの一時半位でもう就寝の用意。兎に角試合にきたのであるから明日の試合が第一。負けては申し訳が立たない。

女中さん四人と共にキャッチフロンがはじまる。敷くにはスライディングのフォーム。枕はダブルブレートのトスの要領。終には女中さんまで覚えてしまふ……身体を振りふりワアワアギアギアキアキ。多分ソフト選手の兄弟姉妹達は家で仕込まれてしまつて居るのでは？（お姉さんなどが本で離縁など……まさかそんなことはあるまいが）明日三試合を控えて選手達は元氣一杯。そうかと思えば教官部屋ではこれ又ど偉い熱の入れ方で、引分試合のクライマックスの回顧に気焔。いくら語つても力んでも尽きない阿倍野との大接戦。然し私の胸中は評判（新聞の予想あるいは関係者の批判の結果）ほどでなく案外脆いチームだから明日は簡単にやれると自信満々。（目隠れるにも程があると思ひますが、事実こう思ひこんでしまつた。必勝の信念は百戦錬磨に生ずるである。）

七時三十分。何時もより早目に今晚は消灯である。（明日は六時起床。）選手は騒ぐのも上手だが眠るのも又巧いもの、今寝たなあと思つて居る間に此処彼処で快眠を告げるサイレンの競争。十一時過ぎ私なども床についたが私の頭の中は今日の試合の反省と明日への作戦で充血した。眠ろうと思ひ思ひ程眠れない。時々

選手（ようやく力を出す）菱沼選手（腕ツぶし強くピンチに当るスラッカー）の单打。その外四球で堂々の攻撃。見たか聞いたかこの須賀高校チーム。快いまでにベシヤンコにして破竹の勢。一方阿倍野高校は鳴かず飛ばす手も足もすひつそり聞（捨てられたモンキータいに神妙悲惨）六回十三対零のワールドゲームとはバニシングゲームより愉快至極。この時の観戦者達本校のスマートさに愈々酔うばかり（五時間位）、役員連中眼ばかりこすつてキョロキョロウロウロ。校長先生もさすがに独りニコニコ早速母校へ電報（何んでもこの日学校の様子テレビでその様子をみたのだがキャアアツで二階廊下の裏板全部ぶつ飛んだらしかつた）を原文にベンを走らす。

本校がグラウンド内をゾロゾロ歩くと皆「カシラー右ツ」の注目。小学生など御丁寧にサインブック持参で、うるさい程サインお願ひしますと攻め寄り嬉しい悲鳴。阿倍野高よりこの方が余ッ程恐ろしい。（お里がバレるとゼロであるから）然し引續いて試合はDコートにおいて長野県代表は伊那彌生ヶ丘高校との対戦である。栃木県代表須賀高校カンパレーの鉢巻声も勇しく。夢に見た阿倍野に勝ち再び闘いの渦中に。一難去つて亦一難。

喜びの後に……世の苦しみにも似てる今日の試合！

その六 元氣あり須賀高

☆長野県代表伊那彌生ヶ丘高校もやはり本校のために後塵を浴せられて宿願も空しく消えて行つたチームの一つ。即ち打倒全国の精鋭を目標にして日曜も休日もなく技の練習と心の準備に傾注した甲斐あつて、見事ワールドゲームの宿願を達したその余勢を以て、いくら追えども実力の相違は如何ともし難く五A対一にて敗れたのである。打ちたい放題。四球は取り放題。アウトにし放題（デモスト

心の中で励ます人の面影なども浮かんで来て。又○氏のグースグースのひびきは物凄く耳の心まで聞えて、蒲団の中は二時間じつとしていたが終には立上つてスタンドを灯けて、独り夜更の部屋にしよんぼり物思い。月は今晚も丸々と名月。

やがて校長先生が隣室より菅野先生（ソフトボール大会委員で昨年山形国体ソフトボールを主催し世話になつた役員で。校長先生の義弟に当る）と共に「やつぱり眠れないのかい。ぢや、……やれば氣持よく眠れるから寝位に」横山先生もPTA各位も。

再び床についたのが二時近く。長蛇を逸した無念がたつて眠れぬ一夜。

☆昨日の眠かさはなくボツンボツンの人影は早朝の球場。本校チーム昨日について今朝も威勢よく練習開始。……やがて小学生団体が三疊側本校ベンチ裏に雪崩れ込んだのを最初にぞくぞく入場。八時十分前。大阪阿倍野高チームも到着、軽トラレーシング開始。（横目でグウツツ）今日は又快晴の好天気ですポツツ日和。八時三十分待ちに待つた再試合は火蓋を切つたのである。

本校のフアイト物凄く阿倍野ダジダジ。試合開始！先攻は勿論本校。全員今日こそ縦横無尽に暴れ廻つてやるよの言葉通り二回表は早くも三点を先取。即ちこの回の一番菱沼四球。阿部内野安打。増川四球で直井送りバント成功。一死で既に一点。斎藤遊撃ゴロはセーフで満塁。そこで……目覚しく当りシャープな一番黒崎左中間へ大三疊打を見舞う。さしもの強情な阿倍野チームも「もうアキマヘン」と尻つぼを巻きホウホウの態。ついで五回打者二巡の二点。六回打者一巡と二人の六点はタイムリー安打の増川

レィション功を奏して……）悉く思ひ儘で幼稚園と大学の試合の感。

ついで太陽は南国特有の光線を照して、もう汗びつしより。ようやく女子高校ソフトボール競技も連日に亘つて熱戦に熱戦がつゞき、佳境に入り人気は更に人気を呼んで若い女性も老人も子供も学生も後から後から目白押しで尽きるところを知らない。場内アナウンスは試合開始。得点報告。試合終了による勝負等四コート分を次ぎ汗だく汗だくの放送。鯉織りは大会の奮戦をシンボルとして南風に巨体が泳ぎ躍る。拍手が起ればアナウンス。歓声が溢れれば花火がひびく。五木の守守唄はノスタルヂアを浮べて全場に流れる。この民族の祭典より逃れて選手一同は工業高校（男子高校で品性が高く賢明そうに察せられ、しかも親切、真面目。同じ四国の土佐高校は日本一のインテリィ高校との定評専ら位で四国学生は向学心に燃えてゐる。それにスポーツを愛好し真に理解しているのが有名。栃木県などは関西旅行より四国へ学校見学の方がブラス多し。ちと叱られますかな。失礼）控室にいき中食することになつた。

聖炎のマークも鮮明な団体弁当。金太樓より小父さん（番頭代理）それに昔野球選手した若旦那（四十才近し）その娘の「はるみ」コフミ子」ちゃんがエッサエッサ運んでくる。何時でも余り召上らない校長先生迄が今日はお美味しそりに食べられる。選手もお腹が空いては戦にならぬと許りに詰め込みに忙しい。間もなく須賀高校より「ヨクヤツタミンナカンゲキ、デイツバ、イ、マスマスノケントウライノル、スカ」の返電（電報も日本一来たと郵便局で驚く）選手は転々感慨無量の状態。宮を発つてからも五日目。無理もない、無理もない。やつぱりねえ。四国よりなつかしい姿や顔を思い出し……ソフトボールとは難しいものなり、難しくしてフアインブレ



「を誓う心の悲しさよ。」

☆第三回戦。北関東代表同志の対戦は群馬の女子高校チームと。いくらポリウムがあつてシメタを打つたとはいへ、手足はだん

く参つて棒になり始めそうなる第三回戦。油断するな。負けるぞ。戦いは強敵と雖も恐れず、弱敵といえども侮らない堅実主義が大切。疲れにへたばるな。人間は気の持ち方で身体はどうにでもなる。選れるな。先頭を切れ。ファイトだ。粘りだ。伝統だ。歴史の一頁を美しくするために戦つて勝つことだ。

この試合は今までより以上の大声を張り上げたので、もうすつかり本校のファンになり後ばかりついてくる面々を落して「アノ監督何時もあゝジャケーンナ、ヨオ泣き出さんて……。人々の波に囲まれたベンチに着けば間髪を入れずキャッチボール、スウィング、ピッチングと風雲は急を告げて。ついでに内外野のヒールディング五分間。(本校チームはタイムアップの放送があつても一分位知らんふり。他校は千返位頭をベコベコ下げてゴソゴソ退散。誠に以て気の毒千方)

ウ、ウーとサイレンの響き。静かだつた一隅より俄かに援声が起る。本日の第五回戦(本校としては第三回戦準々決勝)開始である。ようやく太陽は西に傾き始めた二時半本校先攻に依つて。ベンチ前は陣を作つてサイン打合せ、選手も若駒のように張り切り、明日の準決勝戦を胸中に虎視眈々である。(準決勝は兵庫成徳学園高校チームと予想し既に研究済)この試合早くも二回のトップ、菱沼選手真録を示して中前安打に出ればファンブルして、阿部の送りバントで一死三壘。ついで俊足は増川、二壘ゴロは失策によりセーフ

る。宿敵兵庫代表は皮を切らして骨を断つ式に本校は背水の陣を引いてぶつかる覚悟。投手は名実共に日本一の八木選手。よし打砕いてやるぞの準決勝の意気に燃えて元氣一杯。歴史はこゝに五十年、今いやさかの学び舎に……とバスの中も、行進しても、打倒兵庫代表より外は何もなく声も大きい。負けて悔いなきブレコー生生命。青春の喜びは感激と共に本校ナインの頭上に輝けと。

その七 感激の準決勝戦へ

☆中秋の夜は更けて……朝が来る。早目におきて各新聞社を廻り昨日のニュースを読んで、坂出市役所のニュースカー(栃木新聞社のニュースカーより少し小さくボロだが)がブービー「坂出市の皆様お早うございます。第八回団体ソフトボール競技もいよいよ本日より待望の準決勝戦でございます。コートにおきまして愛媛県代表松山高校対広島県代表安田学園高校の一戦。つづきましては栃木県代表須賀高校に対しては兵庫代表成徳学園高校の二試合。どうぞ市民の皆様、本日の熱戦をご期待下さいませ。坂出市民の皆様お早うございます云々……」し。思わず沸いてくる全身の血は燃えて、よしやるんだ。今日やらねば何時の日ぞ宿願は達する。昨年は悲願に終つたが今年こそ学校、県民待望の栄えある優勝を。それが為には成徳を倒す。成徳を倒さねば本校が倒される。準決勝だ。私につづくを信ず。

中食を終つて出発(午前中は軽くトレーニング行い)、試合は始まる。一壘側に成徳学園高、三壘側に本校。時は正に三時。本校は黄色にすみれ模様の校章が目立つて本校に臨む心意気。本日の試合を満喫せんと会場は大観衆のごつた返し。(午前中高松宮岡同妃殿下

でスタイズプレー確実に成功して一点。打つたした増川ベンチを見て快心の笑ひ、如何にも嬉しそ。ついでこの増川、直井の犠打に還り計二点。更に三回打者七人を送つての二点。四回もついで満塁のチャンスをつかみ二点追加して合計六点。相手は半分試合を投げ、見物人はヘーという表情。五回にはこの回トップバッター増川右翼手第二球目を力の限り強振すれば、青い空にくつきりと弧の球道を画きクングン延びていくボール。左翼手も夢中で追い、中堅手も力走又力走したが遂に左中間を大きく破られ、こゝに殊勲のホームランとなつたのである。(本校本年度の初めての一号ホームラン)場内放送と場内総立ちの見場人の拍手と讃聲に迎えられて文字通りニコニコ恵比寿顔でサツソツのホームイン。嬉しそだつたその時を今尚語れば「マングレです」と言つて赤面するが夢よもういちどだろ。

合計七点。一方桐生高校は本校のメンバートーナメント(同じ北関東代表なる故同情)によつて三点を奪い少々意気を揚げてやつたが敵ではなく第三回戦で悲しく敗れ去つたのである。今日のこの試合に本校オールメンバークが出場して愈々本調子。又不幸に捕手栃木は指指負傷出血するも敢えて捕手の責務を守り通し本校の意気をあげ人気をあつめ(打者が打とうとバットを出したとこへ手を出したのでピシヤと叩かれ血が吹き出し、球審の大黒氏のグレイのズボンに血痕に染める。ウインターヒア)それに投手の菱沼の三連投を始め内外野手とも連戦の疲労にも負けず終始ベストプレーを遂行したことは日頃の成果の現れと結論が出よう。連戦連勝、破竹の勢の本校も愈々明日こそ兵庫代表の成徳学園高校チームと二戦を交えること、決定した。第七回(山形)において敗れたのも同じ準決勝で兵庫代表であ

が参陣になり。五木の子守唄のマスゲームあつたため)勿論本校チームは一人の事故者もなく元氣横溢。相対する時刻は一刻と近づき後攻の成徳シートノックを始めた。ナインが勵し合つて上々のファイルデイングは拍手喝采。つづいて本校の番。例によつて全員駆足はホームキャンパス上に集合。「注意はこれこれ……」みんなもう待つていられないという風になつて飛んで行つた。ボンボン次ぎ次ぎに白い球は飛ぶ。今日はやれる。大丈夫大丈夫。このノックを見て度胸はすわつた。満場技に吞まれてか声はなく緊張の瞬間がつづくプレーボール前。十秒、五秒、三秒、二秒、一秒、カチカチ「サアツ行くぞ」バアツとベンチを蹴つてとび出す本校ナイン。背に余る拍手と声援を受けて、「オネガイシマス」再び背を向けて帰る両チーム。先攻は本校、先守は勿論成徳。

投手マウンド上は成徳「オールファイト、頑張れましよう」と氣勢を挙げる。もう既に一番の黒崎は指示を受けてボックス附近に居た。プレーボールと球審の右手は空を切る。

成徳の投手八木は力一杯の第一球はボール。つづいて又ボール。黒崎口を真一文字にしてボックスを外してこちらを凝視。打て打て力一杯ジャストミートせよ。第三球は真中のストライク。……ボールカントは二ストライク三ボール。ここだと思つた瞬間、ベテラン黒崎の眼には狂いなく見事に打つた。カインとボールは圧力を加えられて中前に飛んだ。ヒットヒットの声は異口同音の夢中、黒崎劈頭に安打を吐き本校の攻撃手を絞めず一ストライク三ボールより代田のバンド、つづいて大島とバンドして二死走者は三壘。福田ストレートの四球の後運命の安打は菱沼によつて爆発した。即ち黒崎三壘、福田早くも二壘に着いた時、菱沼は第四球を



三遊間痛烈に破るクリーンヒット。勿論本校の二者は堂々と両手を挙げてホームイン。よおしよくやつた。よくやつた。作戦通りによくやつてくれた。と心の中で何度も何度も反復する感謝の独り言。

成徳学園は立上り機先を制される快心の攻撃でやられ顔面蒼白。然し敵もここで倒れるような敵ではない。作戦見事成功したとは云えこれが大試合であるこの準決勝。一回裏は成徳の攻撃、連投夢沼の怪投球も空しく一番遊撃坂本四球。二番捕手森下はバンドで一死。(この辺本校内野陣バンド警戒は前進守備にスイッチ)案の定三番一壘大東もバンドはフアストタッチ成らずで無念のセーフで無念の一点献上(ウーム)四番三壘田中は投手飛球。「オーイ内野、内野ッ打つぞおー、打つぞおー」投手の八木はフアルチップ五回して終に三振に倒れる。その時の嬉しさ、その時の痛快さ。他人には分らない位の最大の狂喜だ。悠々とポジションより還る本校ナイン。大丈夫、大丈夫。未だ一点リードだ。これから止めを刺してやるぞにオーライの声。二回表一死より直井の二壘打もその甲斐なく得点とならず。然し試合に馴れし本校益々意気天を衝くばかり。(学校の皆様?心配するところまでソワソワし出しますからどうぞゆつくり気を採らずに授業を続けて下さい、ホント)両軍とも二、三、四、五回無得点、本校六回の表も夢沼、阿部、増川の三者凡退。六回裏——あーあ人間には知れないこの六回裏の運命は本校を愚戯したのである。……成徳この一回一番はラストの二壘玉川三壘ゴロで軽く一死の後、坂本三壘ゴロは阿部のトンネル。何時にもトンネルなどしたことがない阿部、相手に同情したか大トンネル。(本人もガカリときたらしい。)つづいて森下のバンドサイン通り一壘大島拾つて矢

庭にタッチは二死。三番大東は左バッターボックス。(これはスウィングがよいから注意していた。昨日も打つた成徳の至宝)走者二壘に置いて一ストライク一ボールの後は、夢沼、福田の名コンビネーションの間隙を狙ってダイナミックな大スウィングはコキーン。二壘遊撃は手も足も出ずボールは無情にも中前に飛ぶ弾丸ライナー。走者は三壘を廻つてホームに殺到。直井球を拾つて投げんとすればボールを落して慌てるその待避しさ(思わず知らずバタバタ駆け出してナオーエ)ボールはベックホームは好送球なれども遂に間に合わず一点の挽回。ここだ、ここだ。ここでヘタバタたら一気に打ち取られる。「ガンバレーガンバレー、落着け落着け、ツィダワンだからバッターを殺せッ」メガフホンを口に一生懸命。(ベンチではその時はもう傍に居た栃木も大島良も金田もスコラーの関も立ち上つたまま目を白黒させて唸つたきり)しかし興奮に興奮を誘つた六回裏も終にピリオドを打つた。尙も満場は沸きかえつてスタンドは色とりどりの姿が酔っているが、こうなると拍手も嘆息も授声も目茶苦茶でゴザリマスワ。……最後の攻撃は七回表、本校無為。いよいよ成徳も最後の攻撃の七回裏。若し成徳ここに一点加えれば二対二の均衡を破つての勝利。若しここで本校このままに食い止むれば延長戦。のるかそるか最後のインニング。神に願ひ守衛宮の人も思い浮べ、泣いても笑つても最後のベンチを出てゆく時ナインに注意し(特に夢沼、福田のバッテリーには綿密に話して)ポジションに向わせた。夢沼は何時もの通り落着いてバック陣にサインを交わして第一球はストライクの外角低目。打者は八木。つづいてフアルは三本で二ストライクは二ボール。つづくハーフボールを巧く合せれば三壘ゴロでナイスと思つたのも束の間、期待に反して阿部は又

もやボロリとやつた。(ああ運命の神よ我れに幸いを授け給えと祈らずに居られないこの珍事。いつもは阿部にゆけばアクビが出る程信頼してたのに今日は又何たることか……)阿部がシケた顔をして私の方に哀訴すればする程、チームは意気が昂揚した。そうだ一本や二本の失策にくよくよするな、最後まで粘れ、粘つて粘つて粘り抜くより手はない。技術は五角。粘りだ唯一つの望。みそしてファイトだ。ガイバレーガンバレー。校長先生もPTA各位も皆夢中で叫んだラストインニング。

その八 結びて築くこの歴史

☆つづいてピンチヒッター秋山に交替して上田の登場。ボール第二球目。ああッ又もや三壘ゴロ。全身は瞬間にケイレンと冷汗に襲われた。しかし健気にも阿部は球を拾つてあのモーションより流れるようオーバースローで一壘投球(球走者も走る。ボールは一壘に向つて飛ぶ)ああッ、一壘大島前に跳び出した。受けた、背中にもタッチした、走者はベースを踏んだ。壘審は走者と大島の延長線上の一点でセスチャーを示した。セーフと大げさに。途端に私は頭をグワンとぶん撲くられた?意識モウロウとしたようだった。「タイウ、タイム、夢沼来い。大島も来い。みんなこつちへ来い。」既にベンチ後ろでは校長先生顔をしかめ口を結んでワナワナブルブル「アウトアウト」と連呼して怒り立つた。私も怒つてるところではない、一壘審判の横ッ面目がけて拳を握つていた。(ベンチを入れて試合放棄を辞せずの魂膽)全身がガタガタ振えて顔は血の気が引いて激昂。大塚PTA会長も真赤な顔を蒼白く眼を逆立たせた。激怒の中村氏と共に立ち上る。誰れも彼も絶対アウトにせずば試合はやらん。三壘側ベンチも総立アンブ。校長先生と意見は完全に

一致。交渉を始める。夢沼主將、大島一壘手は交代で抗議を申し込んだ。しかし容れられず。(審判の位置悪くして又結果がアウトをセーフと)三壘側ファンももう怒りが絶頂。グラウンドに出て袋叩きにしそりな形相。会場は大混乱の巻と化し試合は完全にストップされ唯成徳の走者が壘上にボツンと二人残つた。(一壘側は全然騒がず)私がベンチより跳び出さんとすれば監督は出てはいけなないと審判が揃つて押さえる。校長先生は無我夢中で立上り強硬談判を叫ぶ。(勿論私は何もかも忘れて……)「よおしもう我慢はできない、今から先生がとび出してどうしても抗議を通す。それまでどんなことがあつても試合はしてならん……」と致命して脱兎の如く球審へ。試合やれと本部員は怒鳴つてもそんなことに耳を籍さない本校。もうひとりで悲しくなつてか。それとも無死走者一、二壘のピンチの不運にてか選手一同はボタバタと熱き涙を流してユニホームの袖を濡し始めた。(シクシクメソメソ)皆んなは怒り立つて……。球審は多田羅氏(これ以来すつかり本校びいきになり高松棧橋までも掃りは送つてくれ年賀状まで下さつた。或製塩工場の社長の息子。慶応大学野球部出身で大会副審判長の肩書。体重二十四貫で身長五尺八寸)当惑してバックネット裏の本部役員席へ私と二人急行。大観衆は見物と許りのヤンヤの拍手、そして又遠雷の如き観声と野次の竜巻の伴奏。(生徒はチラツチラ泣いているふりして横目で注視していた)校長先生はネット近くまで満面激怒の情を表して駆け寄る。誰れも彼も進退ここに谷まつたのである。本部席は長浜審判長ヌツクと立上りわざと落着き払つた物腰で「監督さん監督さんまああゆつくり話しましょうや」と出て来る。(私



にしてみれば審判長もヘチマも有つたものでない。誰れでも来いの鼻意(鼻意荒く)「勝つても大切だが正しく負けるも難しい、それに学生スポーツは……云々」と。現在の本校は不正に負けねばならぬ破目、私も目玉をギョロギョロにしてアアだコッだと口角に泡を飛ばして食いつつた。(強情と思つたらう、私も強情ツ張りは承知しているが生れつきでどうも……皆さんも悪く思わないで下さい。)

しかし私は悲壯な内に考えた。この数々の観衆が認める中で悲運な本校の負け方は必ず認めてくれるだろう……私も強情で涙が胸の方から出て出で仕方がなく眼頭が熱くなり、そして宇都宮の一人々々の顔が浮かんでくる鏡のような涙が。その涙の顔がニコニコ笑つて助ましてくれ。必ず必ず日本一になつてくれ。そうだからう、スポーツマンだと……。選手もそして校長先生もPTA各氏も男泣きに涙を流して試合開始に同意してくれた。試合放棄の準決勝(ソフト歴史にその例ない)かと思つたファンもバカヤロー審判、ただちやおかねいぞおを叫びつやつと収まりがついてスタンドへ。

☆試合開始(この間実に二十七分のトラブル!)悲壯な内にも涙を拭きつつ守りについた本校ナイン、無死一、二壘のピンチをどうするか。(私の胸は未だドキドキがやめない)投手菱沼怒りの表情も妻くバッターをぐつと睨んで(内、外野手もグツとにらんでサインを見ながらの守備)第一球は……相手はバンドのサイン通り打てばホームと小フライ。菱沼サイン宣しく取つて一死(泣いていたがこの時は泣き笑い)次ぎ八番の木村も慌ててか第一球捕手飛球の二死。ウワッウワッの押し寄せる潮のごとき大声、そして声、声、声……ラスト玉川三球三振は見事チェンデ。この時の本校の喜び。(成徳

のガツカリは対象的)とび上つてベンチに選る選手。ニコニコ泣き顔をあげてボンボングローブを投げてバットをとる。よかつた、正直の頭に神宿るとは後ろでの声。斜陽の輝きも祝う如く。延長戦。遂に準決勝は延長戦。代田セフテイバンドは失敗の一死。大島遊ゴロは失策のセーフ(観衆皮肉にアウトアウトと一壘審判を野次る)つづく福田のサードゴロに大島三壘へとびこみ福田で二死。(二壘へは盗塁はスゴイ砂塵をあげてのスライディングで悠々セーフだつた大島)菱沼第二球目カチーンと右手間へ痛打。ウワッやつた、やつた、すばらしいバツチング、ボールは転々と後方へ、大島は勿論悠々とホームイン。菱沼の大殊勳堂々たる二壘打!上を下への大騒ぎはあとからあとから尺きるところを知らない程。つづく阿部気をよくしてこれ又右前に連続タイムリー安打で菱沼危ふくホームイン。二点。絶対的有利な二点。これさへ守れば明日は決勝戦。悲しくも涙、嬉しくも涙のこの準決勝戦。ついに本校はその裏成徳の攻撃を抑えて期待通り明日への決勝戦に駒を進めることになつた。

二列縦隊は整然と応援旗も誇らしげに歩武堂々黄昏れるグラウンドを後に、宇都宮にひびけとばかりに……。

あいろん若さ紅いのに、結びて葉きしこの歴史、世々荒浪の幾重にも、雄々しく守れこの誇り、須賀 須賀 須賀

これぞ我等が須賀学園。その九 名実共に日本一

☆決勝戦。幾年か雌伏して待望の決勝戦は本日。この日を夢見て

唯練習練習に暮れた幾星霜、省みればなつかしくもありそして又胸苦しくもなる私なのだ。今日こそ幾干幾方の人を前にして嗜れの日本一を競う戦いは行われるのだ。昨日の心境に比して今日は誠に坦々としているのが不思議だ。唯この一回戦。団体最後に飾る安田学園との戦い。是が非でも勝たねばならぬ気魄と共に、正しく最後まででも斗わん哉を自勵するばかりであつた。どんなことがあつても絶望はない、絶望と思つた瞬間こそ絶望なのである。

昭和二十八年十月二十六日午前十時三十分。開催地は坂出市は勿論、四国全土、遠くは大阪、九州、関東よりもこの試合を観んものと集まる人数幾千数方。両校とも真剣に行つたファイルディングも終了してプレーボールを黙々と待つていた。(試合場にははもう何も云うことがない程あらゆる角度より注意されてた。)

名実共に日本一の技を誇る広島県代表昨年優勝校で全日本大会に連覇を樹立し昨年団体の優勝校)と闘志と試合巧者を称える本校。数々の観衆注視の内に華々しく巻巻は繰り出したのである。又もや先攻は本校、ベンチは昨日の通り三壘側である。

安田の投手連球の林。捕手はベテラン好リードの貫。一壘スカッガーの木原。二壘酸足の一番打者渡辺。三壘打つてよし守つてよし走つてよしの主将山田。遊撃チビで強肩無類の安倍。左翼殊井、中堅左打者は曲者の橋岡。右翼好守備の住田とベストメンパー。勿論本校も県下大会通りのベストメンパーで打倒安田の意気高く異彩を放つ強者ばかり。(第六回広島大会で安田を三Aタイで破る。)

一々放送するアナウンサーの声も緊張味を帯びて愈々試合開始である。早くも手に汗を握り口に固唾をのんで魅了されようとして観衆はまるで夢心地の様子。闘志、粘り、慎重、スピードが今日の作

戦。(安田学園の個人別特長、欠点は皆調べ上げてOKで私のわきに一覽されている。)一瞬ワァッ。ウー。試合はついに開始……

先攻の本校黒崎二三のあと二壘ゴロ。代田粘つて二二の後三振。大島捕手邪飛球で一回表無得点。同じく安田も一球々々丁寧に投げる菱沼のチェンデオフベースに幻惑されて三者凡者はガツカリ顔。

二回、三回両軍とも三者凡退で接戦に接戦をつづける。打たせると見せて三振にとり、又は内野ゴロに討取る本校菱沼の投球。一方真向より勝負を挑む速球投手安田の八木選手と別々の特質。しかし遂に来るものは来たのである。四回表本校の攻撃はトップ黒崎のストリート四球。バンドサインにバンドを失敗する代田の一死後。捕手後逸と大島のバンドで黒崎は砂けむりをあげて一挙三壘へ突込む。何ら怒鳴つても呼んでも観衆の叫びで消されるグラウンド。福田一球大きく空振り、二球ボール、第三球。運命を乗せた第三球は幸運なるかなジャストミートは猛烈な遊撃ゴロ。ワァッワァッ。福田一壘目指してツマツキながら走れば、日本一の名手、日本一の軽妙遊撃安倍不覚にもファンブル。……ベンチをとび出し、満場立上れば福田の足一瞬早く、審判はセーフセーフと手を横振り。黒崎一塁にホームイン。唯もう胸にジーンときたその刹那、遂に二点、遂に一

点を報い主導権を握つた本校チーム。チェンデになつても夢は優勝旗と結ぶだけ。

夢心地とは確かに意識中の無意識のこのような状態かと思われた。四回表の一点。決勝戦を通じてたつた一点しか入らなかつたこの一点。本校の永遠に記念すべき貴重な一点。正に劇的なシーン。(決勝戦のこの一点によつて歴史を新しくしたのである)尚も感激と興奮はブルブルと全身に……。



四回裏安田は三番山田の攻撃。それこそそれこそ巧妙極まりないセフティバンドは一壘セーフ。やあーこれは一大事と思つたその時、貫はサインを間違えて(安田のサインを盗見る)第一球目ハーフスウィングはコッソリと裏沼の前へ。勿論一死。ところが二壘にいた安田の雌豹山田選手敢然と三壘スチール。福田力の限りの投球は三壘ベース内側五種位離れてショートバンドはポツーンと阿部のグローブへ、阿部はボールをとつたままベタリお座り。そこへ山田選手頭よりザアアと滑込み、アウト。間一髪アウトの宣告。けれど頭を垂れたまま山田選手は動かないで五時間半。クルクルパー。タイムにより立上らせれば悲しい哉雌豹はユニホームを紅に染めて尙も鼻血をタラタラ。(シーンとする)無謀に近い(然し安田はどの試合でもやつて成功。本校にまでやらせ、そうは問屋は御さず)この始末三壘スチールの一死走者三壘でのスクイズプレー同点の夢は敢えなく破れたのである。決断機敏な捕手福田の投球。身を挺してボール(ワンプバンド)を握りタツチした阿部の卓越せる技術。そしてそれまでして勝たねばならなかつた全国ソフト界の名門安田学園主将山田選手の責任感と負けじ魂の悲壯さ。ああ競へ青春強き者である。この回勿論安田は無得点。技も心も一段と冴えず一つと本校も安田も無得点。いよいよ決勝戦も最終回七回へと進んだ。本校三者凡退。安田この回のトップ打者は投手の林、粘つて七球目よく選んで四球。無死にして走者一壘のピンチに又もや追込まれる本校。ところが……走者第一球を大きくリードはここぞと捕手牽制。ウーと唸つた。アームもスーもなく機械的な大島の早業はタツチ「アウト」安田の望みは全く消えたのである。つづいてピンチヒッター畑山が打席につき簡単に二死。本校内野陣張切つて目の前の優勝旗の前祝いとばかり

その十 さようなら第八回団体

☆閉会式。勝つても負けても幾多の思い出を残してくれた団体の閉会式もこれで三度目。一昨年は尾道(広島)での第二位の悲運に泣き。又昨年は山形での第三位の不覚に泣いて今年も三度目の優勝した閉会式。無条件に優勝と野望を逞しくしていた安田もユニホームを濡らして敗戦の將語らず……。ドウモアリアガトウゴザイマシタの私の言葉に「オメデトウコトシハオタクガジュンペンデスヨ」と諦めは心で泣いて男らしいお祝いの辞は安田学園の田原監督。各校選手とも静かにそして奮斗を物語つて……

薫る英氣と純情に、瞳明るいスポーツマン僕の喜び君のもの、擧る凱歌に虹が立つ、友情身にしむ、熱こそいのち、競え青春！強き者、と本校が先頭に立つ。

成績発表。第一位栃木県代表宇都宮須賀高等学校。第二位広島県代表安田学園高等学校。第三位兵庫代表成徳学園高等学校。第四位愛媛県代表松山女子高等学校。

拍手につづいて拍手がバチバチと心から。表彰。第一位宇都宮須賀高等学校、代表監督土岐榮。(私はアナウンサーとしてチャゴラゴラしてしまふ、というは優勝旗授与をカメラに収めようと遠くの方に居たが途端にハアツとしてカメラを審判に授けて駆け出してベコンと礼)生れてはじめての日本一の最初の代表。つづいて巻沼主将が優勝旗をガツチリと。

(このあたり報道陣のカメラの林立バチバチ)つづいて福田副将の個人賞授与。そして第二位……。終ればよい閉会式は仲々

黒崎より阿部へ更に代田へ福田へとボールは廻される。愈々優勝旗も二死となつて決定的である。本当に団体での優勝だろうか。夢ではないのだからかと半信半疑の嬉しさ。ひとりりで今まで見せない微笑はチェンヂの一大観声と共に表現したのである。チェンヂチエンヂ。

石の上にも三年の通り本校待望の優勝。

安田学園を遂に一対零にて降す。

日本一、日本一、名実共に日本一になつたのである。校長先生も感慨無量げに先づ握手を求めてきた。私は眼一杯に熱いものを浮べてそれに応じた……。何も云えない……。選手達が片ツ端から先生、先生といつて寄つて手を握る。選手同士抱き合う。お互に顔を見合つて唯……バンザイバンザイ。七年間の苦勞報いられて遂に優勝バ。ンザイバンザイ。

「ユウシヨウキニナミダアリ、ヒロシマヤスダ ヲータイ〇ニチャブル スカ」と校長先生ワナワナブル手を振しての電文原稿。よくぞ出かした。よくぞ頭張り通した。

毎日見た夢が実現しての嬉しさは眠が分らない。(嬉しい時眠が分るのは未だこれ以上の喜びがあつて夢中の嬉しさでなく分らないのが本当だと思ふ)新聞社、報道班がバチバチ。先生胴上げ！助けしてくれ。この観衆の前では純真な私、テレてしまふ。堪弁してくれ、旅館に帰つてにしてくれ、タノムタノム。宇都宮へ早く早く知らせたくて仕方がない。そしてニコニコの顔を早く見たい。

泣きつ笑いつ手を握つて夢中だつた優勝の瞬間。歴史は永遠に本校の名譽を……。

終らない。風に靡いている優勝旗をソオートと手に触れたその時……。(あーこの優勝旗は校長室に一年間デーンと飾つておけるのだ。我が校の生命のシンボル……。)校長先生もニコニコとカメラを向けて記録写真を幾枚も幾枚……。名カメラマン我等の御大將校長先生の晴れの喜び姿。

会長挨拶。市長の別れの辞。五日間毎日宵空に揚つていた日の丸を下げた黙々と増川、黒崎、阿部、代田、斎藤、直井、大島万、栃木大島良、金田と白いユニホームは黒く戦いを語つて。

放送(今優勝校の宇都宮須賀高等学校を先頭に、つづいて第二位の安田学園高等学校選手がその姿も今日までの熱と力の限りを尽した大会を表わして黙々と退場して参りました。つづいて第三位の……第四位……が敗れたりとは云い悔いのない成績を残して去つてゆきます。優勝旗がひらひらとそしてだんだん選手の色が小さくなつてゆきます。入場式の力強さ、華々しさのそれと引きかえて何と今日は寂しいことでしょうか。奏でる別れのワルツも物悲しく一刻一刻と別れば近づき瀬戸内海のさざなみさえ別れを惜んでいるようであります……。来る年のその日まで第八回国民体育大会よさようならさようなら、全国より集りし晴れの代表選手よさようなら、そして又会えるその日まで永遠に榮えあれ、健やかなれ……。)

別れのワルツに静かにしかも誇らしげに優勝した本校が先頭に進み始める。私がトップ、つづいて優勝旗を手に飾す巻沼主将、皆頭を下げて黙々と増川、黒崎、阿部、代田、斎藤、直井、大島万、栃木大島良、金田と白いユニホームは黒く戦いを語つて。



かくして優勝旗と高松宮殿下が賜った大鯉鱈(P.T.A.中村氏献巻委  
でエツヤツサ)を先頭に校長先生が賞状を抱えて思い出のグラウ  
ンドよさようなら。再び来ることのないグラウンドよさようなら。  
坂出市民の拍手と絶賛とを浴びながら手を振り振り何回も何回も心  
に刻みつつ、優勝の嬉しさは何時しか別の傷心となりて、又宇都  
宮での逢りあいの夢となりて、チンプンカンプンに錯綜した気持  
だけを残して。

☆金太樓や選手喜びは三原山噴火のような大爆発。私が行くや  
帽子も脱ぐ暇も与えずワッショイワッショイ胴上げ。生れて始めての  
胴上げで気持よく思っていたら途端に嘔吐に頭をボカチーン。クル  
クルバー……五分間意識不明。(生徒は又先生どうかしてしまつた  
と泣き出す始末)喜びも又振り出しに戻つてのてんやわんやの大騒  
ぎ。(新井先生もびくびく)

この日名物「かまど」「しほど」などを故郷の人に求め、そして  
国立公園常盤公園の頂上より瀬戸内海の暮景を眺めつくした。ポオ  
ーとドラがひびけば郷愁に打たれつ。夕食には金太樓特製の三  
貫もある大鯛の刺身で全員二十有名は優勝を祝つた。間もなく……  
……やれ市長だ、事務局長だ、校長だ、新聞社だ、隣組(わんざわん  
ざサインも求めて)だなんてこつた返し明日出発を前にして私達は  
お土産物も買えない騒ぎの求客各位の祝辞攻め。優勝旗を座敷の真  
ん中に取囲んでサイン。その晩自分の身体のような気がしたのは十  
二時過ぎであつた。待望の優勝旗と寝る今夜。ただ宇都宮に帰るそ  
の日はかりを……。記念すべき十月二十六日。忘れることのでき  
ない十月二十六日。生命の果てるその日まで忘れられぬ十月二十六

日。  
生涯の輝ける日、あーあ十月二十六日なり。

☆昨日のユニホームはセーラーに幾日振りかたで着替え金太樓にお  
いてゆく優勝旗を心配しつつ二十七日は金尾羅詣りに出発した。  
日本一のプライドは胸を張らせ栃木県のマークも高々心ワッキ  
憧れの金尾羅詣り。世界一高く長い石段を登つて、金尾羅参拜。土  
産も買つて次ぎは源平の古戦場屋島へと急ぐ。そして壇ノ浦へと。  
眺めはケイブルカーの上昇と共に美しく頂上に登れば早速颯自慢の  
クルクル廻つておちる風投げ(日光でもよくある)にキヤツキヤツ夢  
中。さもあらん、今までの苦しみは優勝の楽しみとなつて。  
素晴らしい瀬戸内海に浮ぶ高松港、整然と並ぶ塩田、そして田園につ  
づく四国山脈をながめ心静かに今日の感謝を留めて名残つきない屋  
島にもさようなら、さようなら。

翌日は朝からの小雨。今日の別れの涙のようにさえ思えて一層別  
離の哀愁はこみ上げてくる。十二日間の我が家金太樓とも行きは、オ  
ネガイシマース」が帰りはしんみりと「さようなら」小さく切なさそ  
うに。御主人、若旦那も奥さんも今日は淋しそいな顔。(はるみちや  
んも送るんだと泣いていたが叱られて泣き泣き学校へ)ときれとき  
れに別れを告げて雨の中を雨のプラットホームへと本校生徒達。国  
体歓迎のアーチもデコレーションも雨にぬれて尙悲し。  
今別れてきたばかりの金太樓の人の面影をシット降りに注ぐ雨の  
中の小さい波紋に残して語る言葉も少ない今日。市長さんも、事務  
局長さん、婦人会長さん、顔馴染みの前川静枝嬢やそのクラスメー  
ト達、国体最後の代表のためにぞくぞく見送りにきて下さる。

汽笛のひびきもやがて近くなり愈々生涯又とない輝しい歴史を残  
した坂出ともお別れである。再びこの地を踏むのは何時の日である  
うか、次ぎから次ぎへとこみ上る別れのつらさ。

さようなら、さようなら。坂出市の親切な人達よさようなら。そ  
して第八回国民体育大会もさようなら。心の中で一段と大きくサヨ  
オーナラー。  
汽車は出てゆく煙は残る、出てゆく汽車に優勝旗乗せて。……唯  
ハンカチだけが見える雨のプラットホームの別れのベルよ。あーあ  
永遠の彼方へ。限りない海に私達を運ぶ船だけが高松埠頭に碇泊し  
ている。波は荒くテープを揺るがして。

あんなに待つていた第八回国民体育大会も文字通りのピリオドを  
打つ高松の別れ。  
機橋はゆるくベルと共に昇り、ドラは数刻の内にならんと迫つて  
くる。船と機橋を渡すテープの教本だけが真心と真心を繋ぎ、喜び  
と感激だけをかすかに触れ合せている。  
やがて瀬戸内海一面に落す一筋二筋の雨のようにこのテープは消  
えてしまふらう。

ポオーポオー……はーたあーの、ひーかあーり、まどのゆうらき  
……船は波路を蹴つて静かに静かに宇野の港を残して動き始めた。  
校長先生をはじめ新井先生も横山先生もP.T.A.会長さんも選手も黙  
つて、だんだんかすんで来る雨の高松港を見つめていた……。  
さようならー さようならー の声だけが四国の方へ。  
優勝成りし第八回国民体育大会も遂に終り、しかし、……しかしこ  
の永遠の歴史と伝統は幾多の思い出と共に私達の胸にいつまでも、

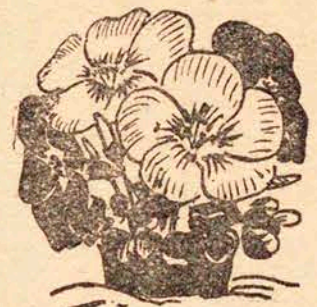
いつまでも、……晴れの日本一、日本一。  
大阪の夜の市街を見物し、京都、名古屋、静岡を過ぎれば東天に旭  
日は昇る爽快な朝。汽車は尚も一路東京へ宇都宮へと急ぐ。東京そ  
して宇都宮。(小山より歓迎陣の出迎えあり)なつかしい人。駅頭で  
のあの歴史的歓迎陣の盛大さ豪華さ。(この事は御存知と察しカット  
します)そして感涙にひたりつた市巾行進。  
本校数千の生徒と応援歌に迎えられる。黒山の市民と花吹雪の中を  
纏つて……。  
優勝旗今ここにあり。……(飾を飾つて故郷に帰る心境のそれは無  
我夢中で)

最後にこの全国制覇は学校全体の結晶として成されたもの  
であり「ローマは一日にして成らず」の感念々深くなるものと思つ  
た。  
関係皆様の御支援を謝すと共に、来年も又優秀な選手が續々と名  
を列ね虎視坦々としておりますれば倍旧の御援助を御願してペンを  
置きます。蛇文失礼いたしました。

永遠の希望なり、若き絶えざるオリンピックよ  
彫める勝利いさおを見すや  
ああ青春の美の祭典なる四国大会  
いざ讃え 生命の泉 生命の泉  
盡きざるを……。(終り)



### 感激の日



一の三 大野 和子

今日は選手達が団体から帰ってくる日である。しかも優勝をして！私の気持ちも何となく朝から弾んでいた。各クラスが分担し掃除をすましてから一列に並んで旗を持ち今や運しと首を長くして待っている、賑やかな音楽と共に歴史はここに五十年と云う声歌が聞えて来た。ああいよいよやってくる。そう思つた瞬間私の心は緊張した。眼の前には選手達の目焼けた元氣そのな顔が次から次と浮んで来る。

急に表通りが騒がしくなつて来た。もうすぐ皆んなの顔が見られると思うと嬉し。やがて颯爽と、選手達がレイをかけて入つて来

た。私の胸は感激に一ぱいであつた。最後までで頭張つて下さつて有難度。心でそう呼びかけながら！選手に続いて出迎える生徒達が後から後から続いた。私達も最後にそのあとに続いて行進した。P.T.Aの方々、先生方、選手代表等の挨拶があり、戦勝報告会は無事に終つた。明日は又先生に土産話をしてもらえる事だろうと思つと、我家に帰る足どりも軽かつた。

一の七 広沢 加津子

去る二十八年十月、四国にて行われた國民体育大会で、輝く優勝を獲得したことは我々在校生始め栃木県の人々にとつても目出たく又非常に喜ばしいことでもあつた。選手一同は宇都宮の菊水祭に當る十月二十九日午後無事に、そして皆元氣に帰つて来た。この日我々在校生は午前中はいろいろと歓迎の準備に當つた。そして三年生は駅まで、又二年生は宮ノ橋までとそれぞれ手に手に小旗を翻しながら、皆が心はずませ学校を出た。私達残りの一年生は校門の両側に列を作り並んだ。やがて時間がせまりいよいよ選手達が我々に帰つて来る。私達は今までより一層心はおどりと待どおしあつた。「まだ来ない。」と

二の四 大山 信子

ボソボンとスピーカーから流れ出るたびにソフトの事かな？と思つてうちにソフトに關しては皆神経が高ぶつていた事と思う。ああ優勝してくれば良いがと離れしなが心の深底で思つていない人はないと私は思う。遠く四国の空高くポールを思うぞんぶん投げ、日頃の練習を精一杯出して戦つて来た選手達のその氣持は離れにいいようがないと思つた。

の真黒に日に焼けたお顔を見ると、本当に私達学校にのこつて居る生徒達の分まで応援して来て下さつたのだと思つてうれしくなつてしまつた。その後では三笠宮妃殿下より贈られた四国のソフトグラウンドにあつたと云う鯉のぼりが人目を引き印象的だつた。

校長先生につづいて選手代表の婦字の挨拶があり、それから栃木新聞社の宣伝カーを先頭に、私達は手に手に旗を持ちそれをちぎれんばかりにふりながら「歴史はここに五十年」の須賀高松歌を唄いながら、市内を行進していった。下野新聞社の屋上からは、テープや紙吹雪が花と舞い散り、いやが上にも興奮のるつぽと化してしまつた。そんな中で又歌が一段と湧立ち、一路県庁へと向つていった。

県庁の玄関には副知事さんやその関係の人達がお出になり、色々お褒めの言葉があり、又私達は市内の人達の感嘆の声を浴びながら学校に向つて行進を続けた。折からの菊水祭で人出に賑う宮内を堂々と須賀高生の行進が続けられた。この日こそ私達学生生活の一頁にのこる最大の記録であらう。

二の四 松本 信子

十月二十九日、私達は日本一に優勝したッ

私達学校に居る者は、皆スピーカーにいいようにして授業などしている所ではない。外面的には先生の手前もあり一生懸命やつている態度を見せているが、内面的に見ると離れしながソフトの事を思わない者はない事だろう。ソフトの戦跡がスピーカーから流れ出るたびに、どのクラスでもウワーと云う声がかげないところはなかつた。そのくらいにみんなソフトに熱中して、学校にいる間はソフトのことで持ちきりであつた。家に帰れば学校の朝の発表がいつも楽しみでしかたがなかつた。朝「お早よう」といながら掲示板をいつも見たもので、やはり家に居てもソフトの事は頭から離れなかつた。十月二十九日、いよいよ優勝の旗を掲げながら市内行進を行つた時の喜びは、たとえようがない程であつた。日の丸の旗を振りながら校歌を歌い、歩いたのは一生忘れぬ思い出となるだろう。自分達の学校が優勝したんだ……と胸を張つて大いばりに歩ける氣持はなんともいえない。

ソフトの選手を迎えに駅に行つた。私は選手達にレイをかける三年生達と一緒にフォームに入つた。フォームにはP.T.Aの方々の市の関係者の方々が多ぜい見え、日本一のソフトの選手を迎えるのにふさわしい情景だつた。もう汽車が着く時刻だと云うのに、まだ見えな。私達が居る前にどこかの修学旅行の中学生達が「栃木県のソフトが日本一になつた」などと云いながら、私達の方を見て「すごいな」と云う様な顔つきをしてきた。なんだかさか得意にならざるを得なかつた。そんな事をして居る内に、待ちに待つた感激を乗せた汽車が、みんなの日に焼けたうれしそうな顔が窓から見えて来た。迎える人達の「バンザイ」の声とともに汽車はフォームに入つた。三年の代表の人達が先生や選手の方達にレイを掛けてあげた。私は感激の中に酔つてしまつた。

そして夢中で外に出てしまつた。駅前には優勝したソフトの選手達を迎える人々でいっぱいだった。その人々の前へ主将を先頭に選手達は横に並んだ。土岐先生もうれしそうだつた。そして校長先生やP.T.Aの代表の方々



二の七 大柿ヤイ

青い空にひびくサイレンの音とともに全  
生が校庭に飛び出した。先生も一列に並び全  
校生徒整列団体一色に彩られたわれらの校庭  
校長先生の挨拶、生徒会長の激励の辞、選手  
代表答辞、そして土岐監督の挨拶、この感激  
にひたつて新しいユニホーム姿の選手も厳然  
と立つたまま動かさず、私達は飛び上つて選手  
達を見た。遠くでは男体山までが泰然として  
呼びかけている様子である。私の愛する須賀  
高ナインよ……選手も今日が最後のグラウンド  
輝かしい歴史とともに舞台になつた最後のグ  
ラウンドだ。壮行会はいよいよ終り明日は元氣  
で選手達は出発だ。応援旗が朝風になびいて  
団体出発を見送る、セーラーの群と人の波は  
ブラットホームに……

間もなくベルが鳴る。歓呼が天にもひびく  
「優勝をたのむよ」元氣でがんばつてねえ」  
「行つて参ります」汽笛一声希望にみちた選  
手をのせて列車は宇都宮を出発した。私達は  
「きよとん」として立つたまま……

その後二、三日は学習も落着いて出来たが  
大会が初まる日になると選手からの電報を待

二の七 大豆生田フミ

私達の一番愛するスポーツ、ソフトボール、  
過ぎし優勝を顧みれば、楽しい思い出の数々  
がまるで夢の様に、私の目に次々と浮かんで  
来る。何しろ今迄にない新しいスポーツとし  
てわれわれに親しまれるようになったソフト  
ボール、それは快活さにもちみちた競技であ  
る。白いボールがつき上げられる。先生と共  
に選手達の毎日の激しい練習ぶり、あの堅い  
ボールを思うままに動かす打込み、このすば  
らしい玉のさばきを見ているうちに、私もな  
んと胸が打たれる事でしょう。憧れの団体県  
代表として出場するソフトボールチーム、母  
校のマークを胸に活躍する事を夢に描き、そ  
して他県の選手を破る日がとも待ちどろし  
かつた。団体出場が決つた時、皆んながどつと  
歓声にあふれた。クラブ代表としてソフトボ  
ールは、団体へ行ける。憧れの四国、しつか  
りね、しつかりねと送り出し、みんなで優勝  
を祈つた。忘れもしない十月十八日、汽車で  
宇都宮を出発した。遠く四国の空を仰ぎなが  
ら、私達は学校生活の中でも一番のすばらし  
い思い出である。優勝をめざす選手達の思い

つばかり、優勝候補の須賀が一回戦あたりで  
負けるものと自分も選手の様な気分での  
中で絶叫した。来る日来る日電報は楽しい知  
らせの電報ばかり、選手達も土岐監督の日頃

優勝旗の陰に

(宿舎にて)

三の一 菱沼ウタ

栄冠を夢みて夜ふけ目覚めればいづく  
にか呼ぶ神の声かな

(学園にて)

二の三 入江享子

功遂げし選手迎へてひたすらにたたか  
ひの日の姿しのばる

功遂げし選手迎へてひたすらにたたか  
ひの日の姿しのばる  
功遂げし選手迎へてひたすらにたたか  
ひの日の姿しのばる

白スヒホーム

二の四 菊池フチ子

寒い時も暑い時も  
太陽の下に  
白いユニフォームの乙女は走る  
機械のようにまわる夢  
団体での晴の優勝を  
学校の庭の隅々までが  
櫻の花で満開でも  
人々の騒音が満ちあふれていても  
白いユニフォームの若人は走る  
彼女等の夢をのせて  
近頃の山々のみもじを前に  
ユニフォームの乙女達は  
足音も軽快に団体へ  
やがて輝かしいユニフォームが広がる  
栄冠を獲得した  
優勝のニュース  
じもした。いよいよ決勝戦迄残つて、選手達  
の熱意ある戦いで優勝をうち取ることが出来

タリ合われぬものはない。今年こそ今年こそ  
つときつと優勝、終日の電報は楽しい期待ば  
かり。そして夢をのせた優勝の電報である。  
ソフト部の血の流れる様な活躍、栃木県代表  
として優勝し、又本校の名を全国に呼び広げ  
て、晴れの優勝旗を高々とかかげてくれた選  
手達、その選手の活躍ぶりが目に浮かび上り  
ます。いよいよ晴れの優勝旗を胸にかかえ、  
宇都宮に全負無事に着き、生徒会長の挨拶。  
生徒会長もただただ感謝の言葉で頭が下るた  
け、それから市内行進。高々とかかげた優勝  
旗に堂々たる選手が行進ぶり。晴の空の下に  
全校参列の中に清らかな合唱。校庭に全員集  
合して校長先生の挨拶、選手代表の挨拶、生  
徒会長の暖かい言葉、土岐監督の感謝の言葉  
と……

生徒は選手の元氣の良い顔が見たく、飛ん  
だりねたり、本当にソフト部の皆さん良く  
活躍して又本校の名を遠く近くに広げ、栃木  
県代表としての重責任を果たして下さつてあり  
がとう。  
ソフト部の皆さんおつかれでしょう。  
本当に本当にありがとうございます。

た。私達は心から祈つた。優勝旗を持つて帰  
つて来るソフトチーム、感激にあふれる須賀  
高校、校内にどつとばかりの歓声が満ち広が  
つた。私達は一刻も早く喜びの胸に選手達を  
歓迎する事を願んだ。三十日の歓迎会を前に  
鈴木先生を始めとして生徒達が愉快に過せる  
ただ一時間の短い時間ではあつたが、熱心な  
声に須賀応援歌を早く覚えることが出来た。  
この為勉強もろくろく進まずただこの日を迎  
えるばかりで一ぱいである。いよいよ二十九  
日となれば、朝から丁度良い天気に恵まれだ  
れの顔も明るい、又嬉しい色がたたらえられ  
ていた。一時三分で到着する選手達、私達は時  
間を待つばかり、楽しみが深かつた。宇都宮  
は菊水祭で大変にぎわつていた。生徒は全部  
片手に日の丸の小旗をかざし、選手達の元氣  
な顔が勇ましく離れの姿にも見ることが出来  
た。選手と共に喜ぶことのできる先生も生徒  
も一生晴れがましい事であろう。県庁前で式  
が行われている立派さ、私は何んと表現して  
よいか想像がつかず、そのまま真直ぐ日の丸  
を振る音に合せて、学校迄行進を続けた。下  
級生の生徒は待ちくたびれていた様子であつ  
た。校庭の中央に掲げられる三笠宮殿下の五  
色の旗と銀織を、美しく見ることが出来た。



式と同時にあげられた花火、母校が優勝に満ち渡る輝かしさ、選手達の顔色にも、私達の顔にも忘れることの出来ないこの日が、いつ迄もいつ迄も心の奥深く刻みこまれ、又印象にも残ることであろう。

二の七 本田 ユキ子

廿九日。私達は石橋駅発十二時五〇分の列車に改札した。私が駅近く行つた時は、もう大部分来ていた頃だつた。私も急いでホームに入り友達のを待ちわびて行つてしまつた。手に手に旗を持ちかわるがわるホームから遠く列車の来るのを待ちわびていた。しばらくして線路のコトコトという音がかすかに聞えると、又前と同じ様に線路の上に首をのびし初めた。私はかすかな音を耳にしながら選手に對しての感激、県代表としての本校の名誉等々が次から次と、泉のごとくとも本校の名誉の様にわきでて来るのだつた。遠く白煙がほのかに見え出した。私達は高く高く手旗を振り選手を迎えた。汽車は静かにホームにすべり込んだ。選手の人達と感激をかわす間もなく列車は動き出し、あわてて乗る有様だつた。あとは列車内の語りともいふのだから。雀宮でも同じに汽車は終点宇都宮をめぐり、

無我夢中

三の一 菱沼ウタ

私は運動と大の仲良である。自らスポーツを愛する、その愛する真剣なる態度が栄冠への道かも知れない。私達のスポーツは常に純粹無難な精神、即、真を愛する精神より生れる。真を愛する精神は又スポーツに對する熱烈なる愛の精神ともなるのであるから、運動をすることと勉強をすることとの間には少しの矛盾も起らないのである。

私はこの様な意味に於てスポーツがいささかでも皆さんに親しまれ理解されれば満足です。そして自分でも好きな道を歩める事を最大の幸福だと思つています。スポーツマンの楽しみ、又苦しみは第三者には想像以外であろう。「栄冠常に涙あり」をモットーとして無我夢中の練習、無我夢中の試合、勝敗にこだわるな」とは云うものの、そんなことは試合が開始されるとは再認識出来ず「勝つ以外に思案はない。これを第三者(観戦印象)K君は次の如く述べている。「打球高く秋の大空たち散りて孤をえがく時胸は高鳴れ、男の子しのごあざやかにプレイ打ち續き興奮に湧く観衆幾千、

派にやり、本校の名声を高め、よりよい学校として行きたい。

二の七 安納 君江

壮行会を盛大に行つて出発したソフトボール選手は、今頃何処に行つたのだろうか。夢を描いて毎日練習に励んでいたあの熱心な選手達は、もう四国の空に向つてボールを投げ始めたであろうか。と私達はソフトボール試合の始まるのを待つていた。そのあくる日の朝であつた。試合の結果を見た、すると0対0で引きわけとなつてゐるのに驚いた。それに優勝候補である阿部野高との戦いだつたので私は心配した。毎日々の電報を楽しみに学校に登校した。電報の着くたび試合はよい成績だつた。いよいよ明日は決勝に迫まつた。学校の中はソフトの話で一杯であつた。私達は心配するやらうれしやら次の電報の着くのを待つばかりだつた。電報が着くと同時に優勝の音が校内一杯に広がつた。校内はてんやわんやのさわぎであつた。もう試合はすっかり終つてソフト選手達の帰りを待つ準備にとりかかつた。日本一の選手をむかえるのは先生方、私達はなんとうれし事だろうか。

若人の力尽くして戦う時に我がまぶた熱くなり来も  
セイフ? アウト? 滑り込みたる本體  
ベース一瞬破體立つ  
純情のブレイン胸のあたまる心地こそ  
すれ昨日も今日も  
一点その差争う白熱の試合つづけり黄  
昏れてなほ……  
勝敗のみにこだわるなれ皆うら若き学生にして

ラインアップ

打順	位置	学年
一	二壘手	黒崎美智子(三)
二	遊撃手	代田照子(三)
三	一壘手	大島万里子(二)
四	捕手	福田和子(三)
五	投手	菱沼ウタ(三)
六	三壘手	阿部シゲエ(三)
七	右翼手	増川純子(三)
八	中堅手	直井フサ(三)
九	左翼手	斎藤順子(三)
補欠		榎木ヒデ子(二)
		金田綾子(一)
		大島良子(二)
		塩山昌子(二)
		関利江(三)

いよいよ今日午後一時三分宇都宮駅着の予定だつた。吾々は駅前、宮ノ橋、県庁前等とわかれて道路に並んで待つばかりだつた。いよいよセンデーカーを先頭に応援歌を町の中にひびかせ、次にソフト選手、監督の先生方が元氣よくここにこしながら行進した。その後には日の丸の旗を持つて応援歌を歌つた三年生二年生が行進をしながら県庁前にさしかかつた。道路を通る人はみな立ち止つて驚いた顔で選手達を眺めていた。私達は須賀の生徒であるという事を町の中にひびかせながら行進を續けた。日本一になつたという事は選手一同と監督の先生の日頃の熱心な努力の賜であると思ひます。

二の九 谷田 部澄江

ソフトボールと云えば須賀学園と離れでも云う。昭和二十八年度はソフトボール部及び学校全体に於て忘れられない年である。前年度に優るとも劣らぬソフトボール部の活動であつた。前年度に於ても全国三位の優秀なる成績を獲得し、今年度こそ選手諸君の堅い熱意と努力は遂に私達の熱望に答へ、須



賀学園は全国一位にその名声を上げたことは我等の頭上に神は輝いていたのでしよう。いやそうではない。希望を目ざして若き熱情と努力とで最上の幸福を結んだのであろう……

熱心なる指導のもとに真夏の冬天下に一日も休まず練習を続け、あの様なブライドを持った部員ではきつと優勝できるだろうと私は思った。そして奮闘に奮闘し、見事にその栄冠をかち得たのである。

試合の状況を見れば、立て板に水のごとくの様な場合もあったし、シイソーゲームの様な苦戦のいばらの道もあった。私達は遠い四国での選手諸君の勝利を遠い故郷で念願していました。

優勝。優勝。眼前それを求め得た時私達は何にたとえてもたとえ切れない喜びと感激の極みであった……

その時、私の心は感動にみちあふれた。あの応援歌にある様に「今やすみれの花が清き学び舎に生い立つたのだ」と思った。私達は感謝と嬉しさでいっぱいだった。

今後、何の方面に於ても劣らぬ成績をとり一人は一校を代表するというスローガンを守り清き須賀学園を築きたいと思えます。

専門部 増淵 里子

待ちに待った第八回国民大会は、秋深まつた十一月会場の四国にて行われました。県代表として出場したわが校のソフトボール部、私達全生徒は必勝を神にお祈りして居りました。あの真夏の校庭での猛練習ぶりを見て、母校の名譽にかけても選手一同の活動を期待して居りました。果せるかな、われらの代表は第一回戦、第二回戦と勝ち残り、それから更に良い戦績をあげ、悠々準決勝まで出られました。選手の皆様は涙ぐましい活躍によつた事と思えます。何と云つても全国の勢ぞろいの争いなので優勝とまでは思いません。でも、須賀高校全国優勝と聞いた時、手の舞い足の踏む所を知らず、全く輝かしい成績を上げ本当とは思いませんでした。我が校は三連戦も団体に出場出来、二位、三位、一位と向上して来た事はこれ又喜びに堪えない次第です。選手の積もり積つた練習がここに実を結び、感激の涙が流れた事と思えます。私達も学校の友達とこの感激を手を取り合つてお祝い申し上げます。

『短歌』

四國國体遠征にて

三の五 関 利江

- きつと勝つ決意新たに校門をいで行く選手四国めざして
- 瀬戸の海小波たたへて栄光をになふ選手を乗せて行く船
- ある時は涙流して動み来て全国一と云はれたこの日
- 血と肉と心でとつた優勝旗主將の姿かすみゆくなり
- たそがれの瀬戸の海のぞむ公園にしばしの幸を求むる我等
- ホツとしておみやげ選ぶ選手達友の姿をまぶたに描きて
- 予期しない歓陣に新たななるその責任の重きを悟る

『俳句』

- 三年の辛苦実りてこの栄冠
- たれぞしるこの感激の一時を

榮冠常に涙あり

三の一 菱 沼 ウ タ

「石の上にも三年の謬の如く、伝統を誇る本校ソフトボール部は毎年優勝候補と云われつつ三年連続団体出場して三年目やつと第八回国民大会にて、前年度優勝並びに本年度優勝候補たる強豪安田学園（広島代表）を破り、初の全国制覇を獲得出来た。榮の優勝旗を手にし瀬戸内海を渡り本州の果てに着いた時は実に感慨無量であった。今靜かに顧みて過ぎし思い出をたどつて見よう。古賀志山より吹き下す雪風の中にもトレーニングあり、ふさふさとした黒髪に真ツ白な鉢巻、他校に劣らぬ「フアイト」「健康」早春まだ霜のとけ切れぬグラウンドにて軽いキャッチボール、又雨天の日は我が家の様に楽しい部屋にてルールの研究、しかしこの様な練習の蔭には監督土岐先生の並々ならぬ御指導と、毎日々々寒暑にかかわらず校庭に出て勵まして下さる校長先生の熱心なるお心が私達選手一人々々に大なる力となつて表われました。かくて十月二十六日優勝の榮冠を得て同二十九日帰校。私達の想像以外の大歓迎……駅前広場にて十二日ぶりで郷土に帰つたなつかしさ。又、菅沼教育長他、各代表の祝辞、嬉しさのあまり胸が一つばいであつた、同駅前出発一時半、祝辞受け、各代表の宮市大通りの人波をかき分けて市中行進、県庁前で提調知事の祝辞を受け、市役所、栃木新聞社、下野新聞社と立寄り祝辞を受け、沿道を埋めた歓迎の人垣の再援を浴びた。

この感激と興奮は大会三ヶ月余を経た今日でも心底に新なるものがある。尚私達卒業後も後輩諸妹の方々、この優勝を守り続けて行くと共に、ますます本校ソフトボール部進展に一層の精進を重ねて戴きたい。最後にソフト部の為に御協力下さつた諸先生方、並びに全校生徒の皆さん、その他父兄各位の皆様には深く感謝致します。

私たちの講堂

二の七 秋沢 テツ子

生乾きのお菓子のような  
初々しい形をして  
講堂は「お早う」と言つた  
いや講堂は言わないで  
中にある私達が言つたんだ  
「君らの講堂は美しいね」と太陽が言うと  
講堂は窓を一ぼいにひろげて笑つてみせた  
いや講堂は笑わないで  
中にある私達が笑つたんだ。



### 須賀榮子先生の二十年祭に當りて

三ノ七 池田 範子

須賀榮子先生は、館林藩士須賀重左衛門正直の五女として現在の群馬県館林町にお生れになり、早くから両親に死に別れ、姉の手で育てられた。幼少の時から學問を授けられて習字、読方などを学び、又日常の行儀作法のことも深い知識を持つていられた。宇都宮の地を好んで兄弟と共に宇都宮に來られた。兄弟は武家の子であつたが當時、武士は生活保障が急になくなり、町人の様に商売も不得手なので、學問があつたのを幸、教員となられた。

榮子先生は東小學校を卒業し、宇都宮中學校(當時は男女共學)を明治二十一年三月に卒業された。學問を好む榮子先生は更に進學し、福島県福島の婦人修正會附屬に入つて、英語、漢文、國語、裁縫等を明治二十一年四月から十二月まで修業された。それでもまだ物足りないので明治二十二年一月から同二十四年四月まで東京の神田にある大成學館に入つて、英語、漢文を習得された。當時、女子で中學校に入るものは稀で東京に遊學する人は殆んどなかつた。その外に華道、茶の湯、音楽など短期講習會があれば、よく出席された様であつた。

將來立派な教育者にならうとするには、常識的な各学科を習得、圓滿高潔な精神を養つておく必要がある。一寸の暇も惜んで修業された。明治二十五年十一月、再び宇都宮に歸り、姉が創立した宇都宮裁縫專修所に學び、ここで修業の上、同校の先生となり専ら女子教育の任にあられたが、立派な女性を教育するには、理想的な教育方法を施さなければならぬと考へて明治三十三年十一月三日(當時の天皇節)に自分で共和裁縫講習所を創立して、女性の裁方に力を注いで、技術と徳育、訓育とに重きをおいて、家庭の婦人としての役に立つ実務教育をした。(之が現在の須賀高女の初めである。)明治三十四年には共和裁縫女學校と改め、自分から校長となつて熱心に教授と訓育とに當つた。生徒と共に勉強もすれば研究もした。すべて家庭的な學校であつた。大正十三年三月文部大臣の認可を得て、中等學校となり、校名を宇都宮須賀女學校と改めた。中等學校になつたその際には、あらゆる苦心苦勞を重ねて設備を充実したので、先生と生徒の間の愛情は濃厚であつたことは他より見て羨ましい程であつた。栃木県に於いて唯一人、女性として私立學校を設立して社會に立つて活躍されたその功績は大なるものがある。

昭和九年の秋に西毛の地にて特別大演習があり、榮子先生は教育功勞者として天皇陛下に單獨拜謁を賜わる筈で非常に感激し、その旅装を整えて居られた時に腦溢血で急死(昭和九年十月十四日)拜謁の光榮に浴することが出来なかつた。榮子先生は一生を捧げて女子教育に専念し、功勞者として數回表彰されたのである。

卒業生も又卒業した後も先生を慕うの心切なるものがあり、懐しき母よ敬する師よと忘れられない。あの徳の高い慈愛の深い先生の恩は忘れようか。又忘れられるものでもない。その高恩を後世まで遺したいとの熱意から、卒業生相謀つて昭和十一年十月十四日立派銅像を建立して、功績を永久に伝えることにした。しかし惜しいことに戦争の為にその銅像は供出してしまつた。

榮子先生は生涯独身で通した。従つて子供がないので後継者として現在の校長先生が宇都宮中學校時代に養子となつた。

昭和九年十月以後は現在の校長先生が學校経営に當られている。その後は若年ながら良く榮子先生の築き上げた學園を引き受けて進歩発展への道を一歩々切り開いて行かれた。その道程に於ける功績には幾多の敬服せられることがあつた。平和なうちに進歩発展を續けて來た本校も、昭和十六年十二月八日我が國民は太平洋戦争の渦の中に巻き込まれ、昭和二十年七月十二日郷土宇都宮は戦禍に見まわれ、悲惨のどん底に追いやられ、四十有余年の尊い歴史を持つ本校は一塊の灰と化してしまつた。

その後盛上がる復興の熱と努力により、終戦の翌年(昭和二十一年)現在の校舎に移転し、益々充実の度を加え、平和の氣溢るるうちに學制は變り、その名も宇都宮須賀高等學校と改め現在に至つた。この間に於ける困難は一通りのものではなかつた。しかし榮子先生の魂を受け継いだ校長先生初め諸先生、全校生一丸となつての活動振りには涙ぐましいものが多々あつた。

現在では創立以來五十五年という輝かしい歴史を持ち、卒業生は実に約一万名、現在生徒數一、四〇〇有余名を擁し、目覚ましい発展振りを見せている。ここにも榮子先生の精神を受けついで生徒一同の輝かしい成果は指折り数えられるのである。

先ず列記されるのは昭和二十八年に開かれた第八回國民体育大會に於て本校ソフト部は全国の強豪強士と戦いを交え、遂に優勝の榮をかち得たのである。

次に総工費実に七百五十万円、建坪一三六坪という大講堂は関係者多數の応援のもとに目出度く落成し、今後の活用が大いに期待されている。又終戦後民主國家となり、私學が尊重されるに至り、國家及び県より毎年補助金が下り、設備の充実を計つている。この様に現在内部の進歩充実は勿論、対外的にも大いに発展を遂げ、栃木県の須賀高、扱ては日本全国の須賀高と駆われる様になつた。

真に榮子先生の精神はここに再び甦えつたとも云うべきであらう。とこしへに華と散りにし先生を偲びてはげむ須賀の學びや



